
未来、希望、私たち

藍絃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来、希望、私たち

【Nコード】

N9372D

【作者名】

藍絃

【あらすじ】

全ての生物の生を許さぬ極寒の世界、大地の底に眠るのは子供たち。目覚めに差はあれど、目を覚ました子供たちは自らに宿った力と、外の現実を知る。外にあるのは自分たちを狙う機械や怪物、子供たちは自分で生きるしかない。おなかが減ろうと、怪我をしようと大人の支えはない。子供と類される人間たちは、これからどうするのかを自分で考えるしかない。どうやって生きるか、死ぬか。世界が救われるかどうかすら、過去に生きた誰にも操ることはできない。全ては、未来に生きる子供たちの手に、委ねられた。

序 くある男の日記

“現代”は、文明として繁栄期を迎えていた。

繁栄期は、大勢の学者によってもたらされたものではなかった。

たった一人、たった一人の学者によって全てもたらされたものだった。

学者はこの世が生み出した最高傑作。

星の意思によって生み出された操り人形。マリオネット

栄えた世界は喜び、そして自然を破壊した。

修繕の余地もなく世界は崩壊した。

人々は、汚染された大地に生きる為に呼吸機が必要となった世界を嘆き、苦しんだ。

学者は、崩壊した世界に喰われ、“種”を産み落として死んだ。

学者の名前は、誰も知らなかった。

どこから生まれ、どこから来たのかを誰も知らない学者は、自ら偽名だと明言して名乗った。しかしその名前は、誰もがふざけているとあざ笑った。

学者の名前は、スベテノ・ハジマリ

これは、彼が公式の場で残した最後の言葉であり、彼の発した最期の言葉である。

「間違えてしまった……許してくれ」

彼が、誰に、どうして、何故、何を。が抜けた言葉に、誰もが疑問を浮かべ、そして誰も答えに行き着くことはなかった。

×××××

月×日

これは、私が綴る最初で最後の日記であると明言しよう。

後にこれを見る人がいるとは考えていないが、こつやつて綴っている時点で期待しているのだろう。

もしこれを見た人があれば、私が誰なのか当てて欲しい。

最後に一つ、これは私の私見を交えないように書こうと考えている為、ところどころ不可解なところがあるだろうが許して欲しい。

まずはこの日記を書くことになった原因から綴ろう。

崩壊を迎えた世界に、人という常識を超えた頭脳を持った学者、スベテノ・ハジマリの死によって産み落とされた“種”は、緑色のビー玉くらいの大きさだった。

彼によって世界中に散らばった“種”は、汚染された大地に住む人々の元へと飛んだと考えられる。

どんな植物であろうと枯れる大地に、その“種”は、花を咲かせた。

この時はまだ、青空を見ることができた。

人々は、それが希望と歓喜した。

“種”は、自らが持つ尋常ではない繁殖力によって増殖していった。

私も、この種は後世の希望だと考えていた。

“種”は、先程記述したように恐るべき速さで増殖し、種を弾けさせた。

私の住んでいたコミュニティには、学者がいた。

もちろん、死んでしまった彼ではない。

死んでしまった彼が抜きんでていすぎた為、脚光を浴びることのできなかった学者たちは、彼ほどではなくともとても頭がよかった。私たちのように、汚染された空気を吸うことのできない人間のために道具を作ることに行き詰まり、学者たちは人々の期待の寄せられる“種”の研究を始めた。

研究の結果、“種”は、汚染された大気によって体に欠如した部分を持つて生まれてきた人を、その失われた体の部分を修復させる効果があることが発覚した。

例えば腕、片腕を持たずに生まれてきた子供がいたとしよう。

その子供の片腕がない方に“種”を落とす。すると種は勝手にその人の腕の形となり、神経すら繋ぐという医療界をひっくり返すような能力を持っていた。

神がくれたものだと言う人もいた。そして、人々は“種”による“治療”を始めた。

それが、大変なことだと気付かずに。

ここで、“種”の特徴を箇条書きに挙げてみる。

- 1 . 人体部品を作り出せる。^{パーツ}
- 2 . 水を生み出す。
- 3 . 火を作り出す。
- 4 . 擬似的な風になる。
- 5 . 電気を生み出す。

6・地面を肥やす。

7・植物となる（これは基本形態である）。

こうした能力を持つ“種”は、この世の法則に当てはまらなかった。弱点はないものかと思われたが、“種”が世に出てから数年過ぎた頃、ついに悪化した環境により日光が遮られ、極寒の地となった大地に、“種”は育つことはなかった。

私たちはシエルターの空調に頼りつきりで、外に出ることはなくなつた。無論、あの夏の日差しや、春の暖かい日差しを見ることができない。

“種”を死滅させることは死と同意義だと考えた私たちは、コミユニティの中でも広いスペースを持つ映画館^{シアター}へと移植した。

“種”は、力強く育ち続けた。

話を戻そう、私が異変に気付いたのは、今日この日が来るほんの数日前のことだつた。

きっかけは、体に欠如を持って生まれた女性だつた。

“治療”を受けた彼女は、身ごもっていた。

しかし相手が誰なのか、彼女は知らなかつたのだ。

誰もが問い詰めた。“誰との子なのか”しかし彼女は、男との接触をしていない、つまりは“乙女”だつた。

一体どうということなのか、学者たちは“種”の研究と平行して、女性の身ごもっているモノが一体何なのかを調べ始めた。

それが何なのかはすぐに知れた。

それは、怪物^{モンスター}だつた。

どんな姿をしていたのか、私は知ることができなかつた。ただし、一つだけ言えるのは人の形はしていない。直感的なものだが、それが真実だと最悪の状況で知つた。

学者たちは焦つた。女性の身ごもつたそれが、生まれ落ちてしまうことを。

誰もが女性を説得し始めた。

それを墮胎させようと、私は、どちらかといえばその考えに賛同できない方だった。何故か、という理由は今この日記に必要なというところで省略する。とにかく私は彼女の味方をすることにした。以下は、私と彼女の会話である。

「何で私の体に、正体も分からない命が……？」

「何か思い当たることは？」

彼女は首を振り、きっぱりと答えた。

彼女の表情はとても凜々しかったと思う。

「ないわ」

「産み堕とすことは？」

「それも考えていな……う、ぐっ……！！」

そこで彼女は、いきなり口元を押さえて苦しみだした。

凄まじい暴れようだった。周りに、墮胎賛同派がいたと思うと、思い出しながら書いている今でもぞつとする。

吐きそうだと彼女が、言い終わるかどうかのところで彼女は吐いた。

吐瀉物は全て、“種”だった。

ここからは日記に戻る。

“種”を吐き出した彼女に事情の説明を求めると、意を決したように、彼女は顔を除く全身を覆う布の、腕の部分だけをめくった。

腕は、緑色の蔦だった。

ここで表現がおかしいと思うものがあるだろうが本当のことだ。腕が鳶で覆われているのではなく、腕が鳶トビになっていた。

そこで私は学者たちが、彼女が、診察の為であつても服を脱ごうとしないという愚痴を思い出した。

彼女は、身ごもっていると知らされた頃あたりからそうなりだしたのだと言った。

ではその腹の子は何なのか、彼女は、私の問いかけに答えることなく、再度暴れだした。

今度の暴れ方は、先程のものを遙かに超え、外にいた人を呼んでしまった。

無理やりに押さえつける学者たちがいた。私は、そこからの退場を余儀なくされた。あの“種”は一体何なのか、私たちは自ら得体の知れない、危険物を招いたのかもしれないと感じた。

数日後、彼女の姿を見なくなった。

それは、今日から見たら一昨日の話だ。

そして今日、私はこの日を“発芽の時”と呼称する。

目覚めたのは、コミュニティとされている建物が大きく揺れたことからだった。目を覚ました私の部屋は、鳶に覆われつくされていた。

気付けば、私の足下に絡み付いている鳶もあった。

それをなぎ払った時、気付いたのはそれが“種”が発芽した時に見る鳶だったこと。

耳を澄まさずとも人の叫び声が聞こえる。

私たちの住んでいるコミュニティは、もはや人の住む場所ではなくなっていた。

地上に残されたコミュニティという名の避難所シェルターは、各地にある。各コミュニティに住む人々も、この異変に目をむいているのだろうか。

死ぬ前に誰かへ何か残したい、それが私がこの日記を書くことに

なった原因だ。初めて書く日記なので順序は考えていない、読んだ者が組み立ててくれるとありがたい。

さて、ここももうすぐ“彼女たち”に見付かるだろう、“彼女たち”は

×××

日記はここで途切れている。

誰が読むのかもわからないその日記は、息絶える寸前の男が、鍵の取り付けられた頑強な箱、付け加えるとしたら完全に密封された箱にしまわれた。

男の行方は、誰も知らない。

×××××

人が生きる為の機能を停止したコミュニティで、メインコンピューターのある部屋は、轟によって破壊された部分もあり、ほとんどのコンピューターは使い物にならなくなっていた。

部屋にあったコンピューターは画面が割れたり、操作パネルが壊されていた。しかし、その中に奇跡的に機能を停止させずに動いているコンピューターがあった。

どうやらそれは、他のコミュニティとの通信用のコンピューターのようなのだ。

画面も操作パネルも正常に機能するそれは、人の手がないというのに勝手に文字を打ち出した。

こみゆにてい、“苗床”ノ、機能停止ヲ確認シマシタ。

他所“苗床”へ、結果報告ヲ発信シマス。

画面に浮かんだ文字は、他のコミュニティへと発信された。

そして何年も過ぎた後、報告画面は、かなり埃を被りながらも、正常に別の文字を表示し始めた。

それは、各コミュニケーションからの返信だった。

こみゆにてい、“苗床”ヨリ。

浄化作業八終了ノ工程ヘト入りマシタ。

人間ノ浄化作業八終了シマシタ。

その報告を受信し終えたと同時に、“苗床”と報告されていたコミュニケーション、S-001は、機能を完全に停止させた。

×××××

外は廃頽した街並みが並ぶ灰色の風景、そこに人の影などあるはずもなく、人は、全て死に絶えたとコンピューター達は判断した。

生命が生きること許さない寒さは、人の作り出した建物めくもりさえも、容易く凍りつかせていった。

全ては星が生み出した学者が創り出した滅びのプロセスだったと、誰が気付けたのだろうか。

後に生きるは、人間という苗床モンスターによって生まれた怪物だけだと、誰が気付けたのだろうか？

全ては、誰の手の上だったのだろうか？

知る者は、いない。

ただ一握りの希望いのちを残して

第一期 始まりの初め（前書き）

一部修正しました。

第一期 始まりの初め

暖かい、何か幸せな夢を見ていた気がする。

それはすぐ手元にあって、当たり前のものであったと思う。
だけど、今は。

×××××

目を開く。

そこには殺風景な土の壁があった。

起き上がって辺りを見回せば、平均的とされる大人一人が入れるくらいの棺にも見える縦長の装置が所狭しと並んでいる。

その中の幾つかは、中身が入っていない。俺も、数日前にそこから出てきたばかりだ。今も自分の寝床としている装置から出てきたところだった。

装置には、中身が入っているのももちろんある。

ただ、中身が入っている内2つくらいは、蔦のようなもので破壊されている。装置の中身は人間が入っている。しかしその2つだけは中身が白骨化している。ただ、それが本物なのかは分からない。
現在の状態は？ いたってシンプル。理由は簡単、ほとんど何も把握しきれていない。

「ノズミさん、起きてたの？」

呼びかけてきたのは……なんという名前だったのか、思い出すのに時間がかかった。

ほぼ永眠状態から目覚めたばかりで、確かに目覚めて数日は経っているものの、この頭はまだ覚醒しきっていない。

「うん、少し前に、えーっと、なんて名前だったけ？」

いつも馴染みのある人以外を呼ぶ時にはあんた、とかお前、とか君と呼んでいたから、どうも覚えが悪い。

とにかく目の前にいる彼女は、暖かそうな長袖の服と裏起毛の少しだぼつとした長ズボンをはいていた。

初めて彼女に会った時、初めに目に付いたのが、水を連想させるかのような蒼い瞳と、左目にかけられた片眼鏡モノクルだった。

現在も、その特徴はあるわけだが、名前がどうしても思い出せない。

「キューノ・サミイ、あ、この前はサミイ、としか言ってなかったよね、ごめん」

そうだ、サミイという名前だった。

キューノ、というのは初めて聞く、だからといって俺自身サミイの名前自体忘れていたのだから非を責める権利はない。

「気にすんな、そーいや俺の名前、言っただけ？」

互いにしっかりと自己紹介をしていないことに気付いた。

名前を互いに知っているということは、これからのことで必要になるだろう。

“これから”自分の頭はこの後が長いと考えているみたいだ。

「ノズミ、とだけ。女の子なんだから“俺”はやめたら？」

言われても直す気はない。ある程度の個性キャラクターは必要だから。

こーやって印象付けておけば、次に会ったときに別人を演じられる。面倒面倒ことを避けるために変えているのだから、また別の一人称

に変えることもあるだろう。

少し肌寒い、自分の入っていた棺のような装置にしまつてある私物から、ウインドブレーカーを取り出して着た。これを始めに見たサミイは、そんな着物見たことも無いと言っていた。

「いいじゃん特に気にすることでもないし、俺はノズミ・セイル」

「ノズミ、セイルね。あなたのはどちらが名字？」

聞かれるのも無理はない、学者　ただしなんて名前かは忘れたの考え出したシステムで、名字と名前を勝手に組み替えていいとかいうおかしいな制度を作ってくれた。

その制度の発案理由だけは覚えている“名前の方が名字らしい人もいるから”これを考えた奴は絶対に馬鹿だ。

名字にも、名前にも変わる名前。そういえば人の名前は、似たり寄ったりになつてしまつたと嘆く老学者がいたことも、記憶に新しい。

「ノズミ、の方。そつちは？」

「私はサミイが名字、キューノが名前」

変わった名前だ。なんて感想は飲み込んでおく。

俺の知り合いにもつと　本人には悪いが　へんてこな名前の奴もいたし、何よりキューノに対して失礼に当たるだろうと考えたからだ。

「名前の方が先なわけね、“外”の様子は見てこれた？」

妙な関心を抱きつつも、先程までこの睡眠室ねいむしつからいなくなつていたキューノへ聞いた。

断定している理由は簡単、ここ以外の部屋は全てあのおかしな“

薦”の生み出す怪物共が徘徊しているからだ。

この睡眠室に何故その魔手が届かないのか、理由は簡単、ここはとてつもなく寒い。

寒さが苦手な怪物共は、ここに来ない。つまり安全圏だということだ。

「駄目、扉が凍り付いて動かない。」

「そっか……他の皆は？」

俺は、キューノたちのように早く目覚めた他の子たちがどこへ行ったのか気になった。

どうやら怪物退治に行ってしまったようで、一緒に来て欲しいと頼まれた。

行く場所もないうえに、無駄に広いこの空間にいるのは苦手だから、丁度いいとばかりにキューノという同行者と共に、別の子供たちが出掛けていった怪物のいる食料庫へと出掛けることにした。

×××××

セイルとキューノは、氷点下すれすれの室温を保ち続ける睡眠室に取り付けられている転移装置の上に立った。

空中に浮かぶ、触ることのできない制御板にキューノが手をかざした。ほっそりとした指でキューノは、文字を書き込んでいく、行く先は食料庫。

光の粒子たちがキューノとセイルを包み、次の瞬間にその姿は睡眠室から消え去っていた。

現れた先は食料庫の転移装置の上。

突然の爆発。瞬間的に動いたセイルは、キューノ共々地面に伏せた。

「きゃはははっ、ほーら鬼さんこっち、らーっ！」

顔を上げたセイルが見たのは、楽しそうに飛び回る子供と、熊。熊にも見えるそれは、茶色い毛皮を逆立てながら、鋭い爪を子供の柔らかい肌を引き裂こうと襲い掛かる。

ただ、おかしな点を挙げるとしたら、その熊がどこかで引つ掛けた傷口が、緑色の蔦で覆われていることだった。

しかし子供は小柄で、動きも素早い。爪に獲物を捉えることができないまま、怪物は苛立つたようにその巨体で子供を追いかけた。

対する子供は3人、そのうち2人は双子で、互いの死角を補いながら逃げ回っている。もう1人の子供は、手に持った蠟クレヨン絵具を使って食料庫に絵を描いていた。

「あ、手出しは無用みたいですよ」

キューノが言い、セイルはクレヨンを持った小女が何か丸い、例えらとしたら爆弾を描いているのだと気付き、キューノへもう一度伏せるように言った。

爆弾らしいそれが、なんとなく危険だと感じたのだ。

「だ、大丈夫なのか？」

伏せながらも危なっかしく熊型の怪物モンスターから逃げる小女と双子を心配するセイルは、伏せたまま小女の描いた丸い物体がぼろりと落ちるのを見た。

それを片手に持った小女は、力いっぱいその丸い物体を投げつけた！

爆音と衝撃。明らかに原因は小女の投げた丸い物体だった。

食料が燃えたらどうしたらいいんだらう。キューノは、目の前で上がる爆炎ばくえんが落ち着くまで待とう、というセイルの判断に従わず、

立ち上がった。

「危ねえぞ?!」

セイルの声を聞きながらも、キューノは、左目を閉じてから、片眼鏡を外した。

再び開いた蒼い瞳が見た炎の真上に、水の塊が出現する。

水の塊が破裂する。土砂降りの時のような水が降りかかる音と、水をかけられて小さな音を出す残り火。

食料庫を乗っ取るうとしていた火炎は、ものの数秒と経たずに鎮火された。

キューノのすぐ側で、セイルは目を見開いて凝固している。信じられないものを見た。といった様子だった。

「ふう……あれ、ノズミさん？」

セイルが固まったまま動かないので声をかけたキューノは、伏せたままのセイルへ片手を貸しながら、もう片方の手で片眼鏡を掛け直した。

「有り得ねえ、つか何よ、それ」

もう一度有り得ないと呟いたセイルは、キューノの手を借りて立ち上がった。

セイルは、思考を一旦切り替えることにして、食料庫に幾つも積み上げてあるコンテナの上を飛び跳ねながらやってくる双子と小女を見た。

双子は、額に軽く汗の玉を浮かべながらも、顔は晴れやかで、笑顔だった。小女も満足したといった様子で、目を輝かせている。

「その小女」

セイルが呼べば、小女は興味津々で歩み寄ってくる。

「さっきのあれ何？」

あれ、とは壁に描いたものが実物化したことだとキューノが付け足した。

小女は、首を傾げた。わかんない、小女は何故あなるのか分からないと答えた。

次にセイルがキューノへと聞いたが、答えは小女のものと同じだった。

知らないうちにこうなるようになっていた。それが答え、セイルは、疑問符を浮かべながらも、今のところは、と無理やりに不可解な事柄に対して困惑する自分を納得させた。

「理解不能なことばかりだ！」

目覚めてから日の浅いノズミは、今の状況に溶け込むにはまだ時間がかかる。

頭をかきながら、溜め息を一つ。

「理解不能なことだらけ、理由は簡単、ここは誰も知らない“未来”という名の氷河時代に入っているから！！」

最後は自棄になったように叫んで、ノズミは自分よりも先に目覚めたキューノや双子、小女に再度、自分たちの置かれた状況を説明するよう求めた。

始まりはいつかなんて誰も気づきやしない

第一期 始まりの初め（後書き）

極稀に文章の書き方を変更していることもありますが、最終更新日
が変わっているものは、大抵誤字の修正です。

第一期 始まりの中（前書き）

少しだけ変更しました。

第一期 始まりの中

氷河時代、生あるものは凍りつく。

それは例え、“種”であっても例外ではない。

もしそれが“種”に飲み込まれた人間であつたら、凍りつくことなくそこらへんを徘徊しているだろう。

×××××

まずは何から話そうか、キューノは、セイルや小女、双子の5人で行った輪の中心の、どんな物質で作られているのか皆目見当がつかない。頑丈な床を拳で軽く叩く。

安全で、ゆっくりと話ができる場所ということで睡眠室ねむむろに戻ってきたのだ。

食料庫では危険があるということで、話すことのできなかつた疑問を年齢に差はあれど、目覚めてから日の浅いセイルが主に質問することになった。

まず聞いたのは基本的な事、目覚めた自分たちのことから。

キューノは小女や双子の名前を知っているが、セイルはこの数日目覚めたといつても、意識が覚醒していない状態の時間の方が多かったので、知ることができなかつた。

初めに名乗りを上げたのは、青い瞳が好奇心という名の光で煌めく小女。

「あたしはシェイリン！ ユイリイ・シェイリン、よろしくね！！」

「ユイリイが名前、間違えないでね！」

えへへと恥ずかしげに笑うユイリイは、自分の真正面に座るセイルへと手を差し出した。

握手を求めているのだと理解したセイルは、ユイリイより幾分か大きめの手をその小さな手に重ねた。

セイルの隣に座っていたキューノは、目の前で手を繋いだままの双子へと視線をやった。

『あのね!』

同時に出た声、しかしあまりにも似ている声だったので、それが2人同時に発したものだどキューノは気付かなかった。

「わ、私はスーシン・ユウメイ」

「あたしはシンスウ・ユウメイ、スーシンの方が遅い生まれなの」

声や容姿までもがそっくりな双子を、セイルはどうにかして特徴を見つけようと声を聞いた結果、少しおどおどとした方がスーシンで、スーシンよりもきはきとしている方がシンスウだと記憶した。

ああ、そういえばシンスウの方が新緑を思わせる瞳で、スーシンは深い緑色、深緑の瞳をしているな。セイルはのんびりと考えながら、頭の中で一つの疑問が浮かび上がった。

「皆、どこの生まれ?」

「俺はヤパネスって国生まれだけど」と付け足すセイルに、輪を作っていた全員がヤパネス生まれで、ヤパネスに住んでいるということとをセイルに教えた。

「全員同じ国に住んでいるわけか……」

道理で言葉が通じるわけだ。納得するセイルに、キューノが苦笑した。

「言葉が通じるのは、これをつけているからなのでは？」

ヤパネスは一つの国だが、その内に属区ぞくという国の中に小規模な国を幾つか組み込んでいるような形になっている。言葉は共通だが、属区ならではの言葉や、訛りがあるため、他の属区の人から聞いた言葉があっても無理はない。

キューノは、自らの右の耳たぶをつまんだ。耳たぶを飾っているのは磁石式マグネットの耳飾りイヤリング。反対側の耳は肩の辺りまで伸びるの黒髪に隠されているが、おそらく耳飾りがつけられている。

翻訳機という役割も果すそれは、属区に住まうものなら誰であろうとつけなければいけない。

「あれ、お姉ちゃんすねは水属区すいじゅくなの？ あたしとおんなじね！！」

水属区という単語に、ほんの一瞬だけキューノが反応したことに、セイル以外誰も気付かなかった。

しかしセイルはそのことを心のうちにとどめ、困ったような顔をした。

そんなセイルに気付かずに、ユイリイは嬉しそうに自分の耳飾と同じ、青い石のはめられたキューノの耳飾りを見つめた。蝶にも見えるように削られ、研磨された青い石は、キューノが特に気に入っているものだった。

「あー……俺から話ふつといてなんだが、本題からずれてない？」

「そうよ、あたしたちが今やることは現状の確認でしょ！！」

セイルに続いて声を上げたのはシンスウ、目を輝かせていたユイリイは、途端に興が冷めたようでふて腐れてしまった。

「ごめんね、ユイリイ、後でゆっくり話そう、ね？」

まるで母親のようなキューノの言葉に、ユイリイは素直に頷いた。シンスウはユイリイの機嫌が直ったと見ると、セイルに向き直った。

「自己紹介は一応終わり、ノズミお姉ちゃんは他に何が知りたいの？ あたしたちが知っている限りで、だけど」

「なら、まずはあの怪物……違った。怪物について、あれは一体何なのか」

熊のようで、おかしな鳶でできた歪で、誰も知ることのなかった怪物、元より環境悪化により、異形化した動物が人里を襲うことはあったが、あんなものは知らないと言いつつ、セイルが言い切った。

シンスウは知らないようで、キューノへと説明を求める。キューノもあまりよくは知らない、自分の知った範囲でと前置きをしてから話し始めた。胸の内では聞いたこともない言葉 もんすたあとかいうもの に対して疑問が浮かんでいたが、そこは抑えた。

「あれは動物じゃない、と思います。さっきの熊みたいな何かから、鳶のようなものが出ていたのは見ましたか？」

セイルが見た。と答える。

「多分あれが本体です」

「はあっ?!」

「あの鳶みたいなのは、本体、今さっきの状況で言うとしたら熊のような生き物ですね、それが死の危険瀕すると緑色の“種”みたいなものになって、そこから中に散らばせるんです。あれに触れたものは、乗っ取られます。」

何を、とは言わないキューノに、セイルが即座に言い返した。

「何を？ 根拠は？ それとなら何でお前らは平気なわけ？」

何を乗っ取られるか、その根拠と、何故それと格闘していたユイリたちが何も無い理由を一気に聞かれ、キューノはまず立ち上がったセイルを座らせた。

そして落ち着くように、と付け加える。

納得はしていないようだったが、セイルはおとなしく座りなおした。

「まずは何を乗っ取るか、それは……その姿、です」

セイルを指差したキューノは、首を傾げるセイルが自らを指差したことに、頷いた。

「例えばここに小さなビー玉があったとして、そこに先程言った“種”みたいなものを落とします」

人差し指と親指で作った丸に、もう片方の手の人差し指をその丸の中に入れた。

それがどうやら例として出されたビー玉と、“種”みたいなもの、のようだ。

「するとこのビー玉は“種”みたいなものに吸収され別の、例えば人の形になる」

言いながら丸を作っていた人差し指で、自分自身を示した。

セイルは、有り得ないと叫ぶと、頭を抱えて唸りだした。

いきなりのことと驚いたシンスウは、小さな妹が怯えないかと心配したが、スーシンは自分に寄りかかって寝てしまっていることに微笑を浮かべた。

ユイリイも眠たげに目をこすり、自分の眠っていた装置の中へとふらつきながらも戻っていった。

「スーシンが寝ちゃったみたい、寝かせるわ」

スーシンを装置の中へ寝かせようとするシンスウだが、まったく同じ体格をしたスーシンを動かすことがうまくできずに、半ば引きずるようにして運んだ。

そのまま、眠気に誘われたスーシンも、装置へと入る。

残ったキューノは、時折頬を引っ張るセイルが話し出すのを気長に待つことにした。

頭を抱えていたセイルは、一旦目を閉じ、冷静に思考するように努めようとしていた。

独り言のような呟きが、キューノの耳にはつきりと届くようになるまで、あまり時間はかからなかった。冷静に思考することが苦手で、少しずつ思考という名の糸が絡みだす。

「だーっ！ もういい、この状況は夢じゃない、何故か？ 理由は簡単、痛覚も視覚も聴覚も、全てが現実であるからだ。それさえ分かればもういいー！」

顔を上げたセイルは、そう叫び終わると今のところは満足したようで、キューノの真正面へと移動した。

「そこでサミイ、俺が聞きたいことはもう一つある。ユイリイ、だっけか？ あの子が描いた絵が本物になった。お前も、水の塊を作り出した。一体どういう仕掛けだ？」

描いた絵が本物、実物になるなんてことは、常識では有り得ない。何も無いところから水の塊を作り出すことも、子供では絶対的に無理だ。

これこそが、セイルが一番聞きたかったことだった。

しかし現状と、怪物のことも頭に入れておきたかったため、後回しになっていたのだ。

「……さつき、話していましたよね？ 私とユイリイが同じ水属区だ、と。それが理由ですよ」

「嘘だ。それ以前に理由になっていない」

セイルの発した言葉は、明確な根拠があつてのものだった。

属区に住んでいようと、そのような力がある者など限られていて、付け加えるとしたらそれは大人だと、セイルは断言した。

少女であるキューノはともかくとして、小女であるユイリイでは有り得ないことも付け足した。

「あっさりとバレちゃいましたね……これを見てください」

元より試すつもりだったキューノは、あっさりと嘘を見破ったセイルに対して、見えるように自分の服の袖をまくった。

キューノの左腕を飾っているのは緑色の、蔦のような紋様。紋様に見えるそれは、肌の表面にをとどころ立体化させていた。

それを見た瞬間に、セイルは立ち上がって数歩下がった。そのすぐ近くには転移装置、いつでも逃げられるようにという考えが丸見えだ。

「あはは、思ったとおりの反応をありがとう。でも私は意識もあるし、おかしくもなっていないでしょ？」

「だからって今さっきの話を聞いてたら信じられないんだが？」

言いながら、一步後退。

逃げる意思がありありと浮かんでいるセイルに、キューノは苦笑を深めるしかなかった。

「それなら、さっきの話がまったくの嘘だとしたら？」

「それも信じられない」

「何故？」

断言するセイルが、腕を組んで床を何度か足で叩く。

意表をついた言葉に、キューノは目を丸くした。

「さあね、それよりおかしくならない理由と、その“種”みたいなものにもう少し話してもらえるとありがたいんだけど……？」

再度外れかけた話題を戻そうとするセイルだが、キューノがそれを阻止した。

瞳に浮かぶのは、不可解なことに対する疑問。

「“さっきの話がまったく嘘だということ信じられない”という理由を聞かせてください」

「嫌だね」

誰が言うものか。セイルはキューノから視線を外し、そっぽを向いた。

「言わなければあなたに何も教えることはしませんか？」

「それでも嫌だ」

「じゃあ教えません」

「それも却下して欲しい」

「なら言ってください」

「嫌だ」

「だから、言ってください」

「だから嫌って……！！」

このやり取りは、あと数分したらセイルが折れて、話すという結果が現れる。

しかし、今のセイルとキューノは、先の見えない、終わることのないやり取りを繰り返す。

現状把握ができているのか、いないのか。彼女らは自ら全てを把握しなければ、戻ることも進むこともできない。

第一期 始まりの中（後書き）

現在連載中の大空を飛ぶ者と並行して連載していきたいと思います。作者は気まぐれ更新をよくしますが、気長に待っていただくとありがたいです。

第一期 始まりの終

覚醒せよ、貴様も道連れ、逃がしはせぬ。

一度覚醒したならば戻れるはずもない。

さあ、貴様の運命はアレと同化するのか逃げ切るのか。

時刻はセイルの設定した目覚めの時間。

気付け薬のような効果を持った気体が、閉じきった装置へと満たされる。

「……ふあ」

安眠を約束される装置から目覚めたセイルは、今の時間が夜中の2時を示していることを確認した。

時間を確認し終えたので、懐中時計を閉じるとセイルは、音を立てないように装置から出る。

辺りは主な電気を落とし、予備の灯りだけが照らしていた。

どこかにある電源を入れれば今のようなぼやけた灯りではなくなるのだろうが、セイルはそういった仕組みを知っていない。

薄明かりの中、目を凝らしながら探しているのは上へと伸びる梯子。

不気味なことこの上ない。気味の悪い現在の状況に、嫌悪感を隠せずにセイルは顔をしかめた。

「あつた」

一部分が凍り付いている梯子が、薄暗い中、電燈を反射して光った。金属で作られている梯子に、手を触れたセイルは、あまりの冷たさに声を上げそうになった。

突き刺すような冷たさを持つ梯子に、セイルは再度手を掛ける。熱された鉄を冷水の中に突っ込んだ時のような音がした。

音源は、セイルの両手。

セイルの手が、赤く発光している。

それを意識していないのか、それとも分かっているのか。セイルは気にせず、足を踏み外さないように梯子を上っていく。

外へ出る為の出口の一つはここ。もう一つは怪物たちが大量に徘徊している通路を通らなければいけない。

セイルは、騒がしくすればキューノたちが何かの拍子に起きてしまうのでは、と考えたのだ。

「やはり、凍っているのか……」

溜め息交じりに吐き出した言葉は、自分のすぐ頭上にある出口を塞ぐ氷に向けられた。

手で軽く叩くと、澄んだ音が返ってきた。

「さて、と。この打開策は？」

誰に言うでもなく、自分に向けた質問。

「ある。理由は簡単、あいつの言っていた能力チカラ、俺にもできるはずだ」

そう決意を固めると、セイルはキューノと数時間前に話された能力を使う為のアドバイスを口にした。

「集中しろ、そこにあるものだと思えしろ……ね……簡単に言ってくれる」

簡潔なアドバイスを思い出し、苦笑いを浮かべながら片手でしっかりと梯子を掴むと、もう片方の手を、入り口を塞ぐ氷へと向けた。

瞳孔が紅く染まる。

薄明かりに照らされていた部屋が、一瞬だけ、オレンジの光に満ちた。

×××××

朝の6時、睡眠室にある装置の内4つから人が出てきた。

眠たげに目をこする双子と、私物なのか手に持った首飾りを引きずる少女、一番目覚めのよくないキューノは、室温がいつも一定であるこの部屋が、いつもより冷えていることに頭の覚醒を強制的に促された。

体をさすりだしたユイリイと、体を寄せ合うシンズウとスーシンは、ある一点を凝視したまま固まってしまったキューノを見た。

キューノの視線がどこで固まっているのかを辿ると、そこは、上へと伸びる梯子で、一番下の部分は、白い物体で埋もれかけていた。それは、キューノの記憶にはないもので、ユイリイや双子の少女の記憶にもないもの。

「まさ、か……ノズミさんっ?!」

急いで確認したのはセイルの眠っていた装置、そこには誰もいなかった。

ぬくもりも、元より寒いこの部屋、残っているはずもない。

だが、転移装置を使った痕跡はない。どこへ行ったのだろうか、キューノの中で、疑問が渦巻く。

「シン姉ちゃん……」

スーシンが、不安げに姉の服を掴む。

珍しく怪物たちが睡眠室の近くまで来ていたのだ。

狼にも似たそれが、咆哮を響かせる。

幼いユイリイは、キューノへ抱きつき、まだ少し、精神的に幼いスーシンは、シンスウの手を強く握った。

「大丈夫だよ、スーシン」

安心させるように、握られていない方の手で頭をなでたシンスウは、離れない妹と一緒に、梯子のすぐ近くまで歩き、その上を見上げた。外は雪が降っているようだ。

冷たく、白い物体が、雪が空からおりてくる。

しかしそれは梯子の真下にのみ存在するもので、風に飛ばされたのか、部屋のところどころに散った結晶たちは、溶けたもの同士で小さな水溜りを作り出していた。

それも、すぐに凍りつき、氷へと変形していた。梯子を上っていったのは明らかだった。

「お姉ちゃんを探しに行こう!!」

言い出したのは、やっとキューノから離れたユイリイ、しかしキューノは探しに行くことが困難だと考えた。

極寒の地と化している大地に立つには、確実に防寒具が足りない。キューノは冷静に解析すると、未だに不安そうに視線を彷徨わせるスーシンと、すでに外へ出る気が満々なシンスウを見た。

「駄目だよ、危ない」

「ど、どうして!」

ユイリイが、大声で聞いた。小女の瞳は、不安げに揺れていた。まだ会って間もないというのに、セイルを助けようと言い出すことに、内心でキューノは、不思議がっていた。しかし、声にはしない。

不安を隠せないユイリイに、駄目だ。とキューノは再び言う。危険な目に会う確立が高いというのに、幼い子供たちを連れて行くことはできないからだ。

そのことに、ユイリイは気付けない。

自らの道理を通せずに、小女は、キューノへと怒りをぶつけた。いけるのなら、自分だって助けに行きたい。それでも抑えなければいけない、キューノは、自制心を固くする。

「……あの……」

苦々しげに顔を歪ませるキューノへ声をかけたのは、スーシンだった。

シンスウの服を掴みながら、注目があることで赤くなる顔と、心を少しずつ落ち着かせ、スーシンは、発言した。

「私の、風の力を……使えば……」

言い終えてから、姉の服を更に強く掴んだ。

引っ込み思案なスーシンが、自分から助力を言い出したことに、キューノは、少なからず驚いていた。

シンスウは、よく言ったとばかりに、スーシンの頭を撫でている。そして、キューノに対抗する術を持ったシンスウは、堂々と発言した。

「スーシンがこう言ってくれてる。あたしは行くよ、妹がこう言っているんだ、姉として、守ってあげたいからね」

止めないでね。双子は、すでに決心を固め、動き始めようとしていた。

スーシンは、風による想像による創造の力を持っている。今、彼女が目を閉じ、集中しているように、創りたいものの形を想像してそれが現実にあるものと念じる。

それだけで実体を持った“もの”が、現れる。今スーシンの作り出したのは、意匠がまったく同じの、分厚い防寒服だった。

「駄目です！ 行くのには反対です！！」

防寒服を着込んだスーシンとシンスウは、続けてスーシンの作った手袋を装着して、梯子の前に立っていた。

キューノは双子と、双子についていってしまいそうなユイリイに向かつて大声を上げた。

冷え込む部屋に、声が反響する。

双子は、その声を背に、梯子を上り始めた。そして、双子は互いに互いの声を合わせた。

『私たちに指図しないで水属区の間人間が』

子供らしくない、冷えた声。まるで汚物でも見るかのような視線は、双子の瞳からだった。

一瞬息を止めるキューノに、怯えを隠せないユイリイ。

双子の口は、動きから、発する言葉まで、全て同じだった。

『何で他の属区の間人間が心配をする？ 我らを束縛するな』

縫い付けられたように動かない足は、双子の姿が消えるまで、動くことを許されなかった。

風の属区は、他の属区と比べて絶対的に自由意志が強い。特に、束縛を嫌う。

何をしようと、何を考えてもそれは個人の自由。風属区ふうそくの人間は、放任主義とも言われる。だからこそ、逆に子供の頃からしっかりとした性格の人間もいる。

束縛。それが風属区としての、束縛を嫌う心呼び覚ませた。

キューノは、まだ呆然としている自分を落ち着かせた。隣で涙を浮かべているユイリイのためにも、自分がすっかりしなければ、ユイリイが望んでいなかったとしても、自分はそうするしかない。

「怖くない？ 大丈夫？」

できるだけ優しく、安心感を与えるように言った。

ユイリイは、今にもこぼれだしそうな涙を溜めて、キューノを見上げた。

小さな振動だったが、溜まっていた涙は、ユイリイの頬を伝った。続けて、泣き声が上がった。

「う、うえええんっ！ こわっ、かった……っ!!」

キューノに抱きつき、泣き出すユイリイを、キューノは優しく抱きしめた。

ユイリイは、キューノの肩に顎を乗せるような形で泣いている。キューノの顔は、もちろん、見えない。

だから、彼女が微笑んでいたなどと気付けるはずもなかった。

×××××

「お姉ちゃん、どこ行けばいいの？」

「分からないよ。とにかく、ノズミお姉ちゃんを探さなきゃ」

勢いで出てきたに近い状態で、スーシンは、辺りの寒さに身をすくませている。数十分ほど歩いて、あまりもの視界の悪さに、足を止めていた。

シンスウは、猛吹雪により、ほとんど確保のできない視界の中、目を閉じて、耳をすませている。

何も聞こえるはずもない。もし何か聞こえたとしても、それは雪を舞い上げたり、横殴りにする風の音。または、時折飛んでくる、朱塗りの木片が、どこかへと落ちる音くらいだ。

スーシンも、姉を習って耳をすませてみるが、何も聞こえてこない。そのまま数分ほど、シンスウを待つことにした。

目を開けていられない、目にある水分が吸い取られていってしまう。スーシンは、目を閉じ、目を保護してくれる何かを創造した。

目を覆う硝子、そして耳にかけるための蔓つゝ。普通の眼鏡よりも大きめの、大型眼鏡を、まずは自分、そして耳をすませたまま動かないシンスウにかけてやった。

「……あ！」

シンスウが声を上げた。何か聞こえたようで、スーシンに伝えようとしたが、妹にも聞こえていたようだった。

音の聞こえた方へ、顔を向けていた。木片の落下するような音でも、風の叩きつけるような音でもなかった。人の声だ。そして、爆音。

すぐに吹雪が隠してしまったが、明らかに誰かが“何か”と戦っている。

見えたのは橙色の光と、紅い光と、爆炎。

「お姉ちゃん!!」

焦るようにスーシンは叫んだ。シンスウも、すぐに頷いて光の見えた方向へ走り出す。

目も明けていられない状態で進んでいた2人には、今は目を保護する眼鏡がある。方向は間違えない。

強風が邪魔をするが、シンスウが先頭に走っているうちに、風は勝手に、そこだけ穏やかに流れていくようになっていた。

進行を妨害するものは、視界を遮る雪たちだけ、スーシンは遅れないように走る。

少し走る速度を上げたスーシンは、シンスウに聞いてみた。

「どうして、あのお姉ちゃんを気にしているの？」

一瞬、シンスウの走る速度が遅くなった。ただ、一瞬だったので、スーシンは気付かない。

「……風の……」

穏やかな風は、呟きにも近いシンスウの声をスーシンの元へと届けた。

「風属区や、土属区どそじくに……似てたから、多分、違っただろうけど」

自由を求める性質を、セイルから感じ取ったシンスウは、そう答えた。

「そっか……私たちは似てる人を助けちゃうからね」

できるだけ少ない動きで発せられる言葉だったが、スーシンは楽しそうだった。

似たような性質を持っている人間を、同族とは思えなくとも、同士と考えることのできる風属区特有の精神。それがシンスウを動かしていた。

スーシンも、納得がいったようにもう一度小さく笑うと、距離を縮めていく橙色や、紅色の光へと向かっていった。

人は、自分の許容できる範囲外のことには、とてつもなく弱く、脆い。

第二期 出会いの始(前書き)

言い回しがおかしくなっていたので修正しました。

第二期 出会いの始

忘れるな、一番に怖いのは表面上はおとなしく、内心で何を考えているか分からない人間だ。

辺りの雪を溶かし、周りは真冬だというのに真夏を思わせる状態にしていたのは、双子にとつてはつい最近会ったばかりの人間で、もう一人は炎属区と思わしき人物だった。

互いの両腕が発光している。セイルが片腕を思い切り前へと突き出すと爆炎が辺りの視界を奪う。対する炎属区の男は、片腕のみだったセイルとは違い、両腕を高く上げ、まるで刀剣類を握るかのように指を曲げた。

小さな光がともし、炎で形作られた刀が現れた。シンスウは、遠くから、よく見えないそれが何なのか確認しようと眼鏡を外そうとした。スーシンがそれを止めさせ、自分達の周りが今、おかしな程に加熱していることを伝えた。

危険だと察知して、一步下がる双子の背後に、何者かの気配が近づいた。

「はい、動かないでもらえますかね？」

シンスウが素早く振り返るよりも早く、スーシンの首筋に鋭い輝きを持つ刃物があてられていた。

瞬間的判断で動きを止めたシンスウを褒めるかのように、その何者かは刃物を持つ手と、もう片方の手で小さく拍手をした。ごく微細な動きとはいえ、刃物に軽く触れたスーシンが身をすくませる。

「スーシンに……手を……出さないで」

「あなたが動かなければ、ですがね……もしかしてとは思いますが、あそこで戦っている方とお知り合いですか？」

響いてきたのは飄々とした印象を受ける男性の声。肯定を示せないスーシンの変わりに、シンスウが二度ほど首を縦に振った。

スーシンの事もあって、シンスウの視線は依然と、時折爆炎を撒き散らすセイルと、炎属区の人間の方へと向いたままだ。

後ろでは、深海の瞳が思案の為どこか彼方を向いていた。

「アギラっ！ 一体何のつもりだ?!」

紅炎の剣を交わしながら、セイルが橙色の炎で盾を形成しながら叫ぶ。

炎同士がぶつかり、火花を散らす。極寒の地だというのに、アギラとセイルの戦うその場だけはまるで真夏のような。

次々に襲う寒波も、互いの炎に打ち消されていく。

「黙れ、一族の裏切り者がっ!!」

アギラの怒りに反応したのか、紅炎の刀が、大剣へと質量を増した。

このままだと今いる場所すらも危ないだろう、現に火の粉が飛び散ってきている。深海の瞳は即座に被害の及ばない場所を探し、距離を計算して、最短距離での移動をした。

刃の脅迫が外れたが、足をすくませるスーシンの前に立ったシンスウは、両手を突き出して、親指と親指で底辺を作り、残りの指全部を使って三角形の形になるように指をあわせた。

紅炎の剣が今まさに獲物^{セイル}を捉えようとした瞬間、

「目を閉じてて!!」

シンスウが、三角を形作ったままの両手を地面へと押し付けた。反射的に目を閉じたスーシンの目の前で、土の塊が津波を起こす。突然のことで回避が遅れたアギラは、押し寄せる波に弾かれ高く、飛んだ。

意識を失い宙を舞うアギラを視界に捉えると、セイルは押し寄せた土塊を踏み台にして跳躍する。

思ったより大きく出てしまった力に困惑し、制御のできないシンスウは、地面に押し付けていた両手を侵食する鳶を気にせず、体をきつく抱きしめた。人を傷つけるかもしれないという恐れが、震えを止めさせてくれない。

意思を持たず襲うそれは、まるで自然災害のようで、被害範囲を広げては周りにいる。すでに避難していた青年の場所や、発動者の周り、シンスウとスーシンのところまで及んでいた。

アギラのみを助けることに集中しようとしていたセイルは、舌打ち交じりに悪態をつくくと、短く何事かを唱えた。

それは理解できないほどに、無意味な文字の羅列だった。

「繫緋満瑞治雑吹封硬琴！！」

呪文めいた言葉は、音の波紋を広げ、“力”の領域を広げていく。

波紋が十分に行き届く頃にはセイルは、アギラを救出し終えていて、おとなしくなった土塊に守られながらゆっくりと着地した。

未だ暴れ続ける波に、波紋は届かないようにも思えた。だが、静かだった波紋は次第に“力”自体を具現化させ、風が、影響を受けていなくなった土が、波を押さえ込んでいった。

圧倒的なその場面に、ほんの少しだけ意識を取り戻したアギラは驚きと異端を見るかのような厳しい目でセイルを見た。

「化物」

一言だけの言葉だった。しかし、人を傷つけるには十分な言葉に、セイルはただ、苦笑をもらした。気付けばアギラは戻った意識を、闇の奥へと沈ませたみたいだ。

溜め息を漏らすかのように小さく吐いたセイルの息は、寒さを取り戻したことにより白く、見えた。

×××××

燃えている。避難所と言う名の棺が。

雪が暑さによって融ける。融けてできた水は、唯一あいている地下からの出口を塞ぐかのように流れている。

その光景を呆然と眺める小女と、冷ややかな蒼い瞳に笑みさえ浮かべてみせる少女がいた。ユイリイは、空へと登る黒色の混ざった煙を見上げているだけだった。今自分の立つ地面の下には、まだ目覚めていない“仲間”がいたのかもしれない。それなのに、今こうして燃やしてしまっていることに若干の疑問を抱かずにはいられなかった。

「ねえ、どうして……燃やしちゃうの？」

言いよどみながら、ユイリイはたった数日とはいえお世話になった避難所の事を思った。見たことも聞いたこともないようなものばかりで、果てには“こんぴゅーた”やら“こんてな”やら“てんいそうち”という、どこの属区にもない言語に戸惑ったことを思い出した。眠っている人もいた。でも、違う属区の人だった。

それでも、同じヤパネスに住む人だったのに、ユイリイは頭の中で細長い糸が複雑に絡まる錯覚を覚えた。

しまいには瞳にうつすらと涙を浮かべるユイリイに、キューノは、冷酷にも言い放った。

「これは駄目。“外”から来た恐ろしいもの、あなたみたいな子供が触れてはいけない穢れ、私もそのうち“浄化”をしないとイケない……違う属区の間人は信用ならない、それはいつも言われていることよね……？」

親の言いつけを守らない子供を、優しくたしなめる親のような口調に、ユイリイはいつの間にか瞳に溜まっていた涙をこぼした。親の言いつけを守らなかった時のことを思い出していたのだ。

身内の、外部に対する敵対心を増加する為にも幼い頃から行われる洗脳にも近い行為。徹底的に別の属区の間人は悪だと教え、水属区を頂点と仰がせるそれに、子供、しかも自我の成長の時期にあるユイリイにとつては、それは疑問とすることすらおかしいと感じさせるものだった。

「そう……だよね…別の属区の間人は悪い人なんだ。あの双子も、最近目覚めたばかりの…でも、あのおねえちゃんはこの属区なんだろうっ？」

そういえば聞いていない、とユイリイは首を傾げた。その目には、すでに罪悪感の欠片もない。

避難所は、半分くらいが焼け終えたのか、火は少しずつ弱まっているようにも見えた。少し焦げ臭い。キューノはその臭いを感じないように風上に回った。

「水属区の間人ではないのは確かだよ。だから、ためらう必要もない」

言い切り、ユイリイに向かって二言三言発してから、今度は別の言葉、確認を取るように一言一言を明確に発音した。

「私たちの目的は？」

「生きること……と……」

言いたくないと、心の奥底で叫び声を上げる幼い声に、ユイリイは耳を塞ぎたくなった。もし言わなければまた、“闇”を見せられることになる。幼い子供にとっては、それは最大の恐怖で、絶望でもあった。

キユーノは、それでも言うことを強制した。シンスウやスーシン、セイルと一緒にだった時とは違い、とても冷たい瞳をしていた。ユイリイを見る雰囲気は、まるで道端に転がる石ころを見るようなものになりつつある。

勢いに背中を突き飛ばされるかのように、ユイリイは叫んでいた。叫んだ言葉は涙声で、とても聞き取りにくかったが、キユーノはその言葉を聞いて安堵したのだろう。笑顔を浮かべた。

酷く、歪な笑顔だった。

×××××

「とにかく、私たちの拠点としている場所へ来ませんか？」

提案したのは深海の瞳を持つ男だった。気絶したアギラを除き、全員が肯定することによりそれは可決された。

何やらアギラと因縁のあるらしいセイルを招くことに、シオンはためらいを持たなかった。代わりに、幾つかの質問をすることで危険性を図ることにした。アギラは、自らが眠っていた装置の中で、すぐに目覚める眠りにについている。

「何故この場に居合わせたのか、特にその双子さんはね。それと、

属区を教えてくださいませんか？」

属区。それは彼らを区切る為に重要なことだった。水と火が敵対しているように、氷と雷が敵対しているように、風と土が干渉を決め込んでいるように。金の属区の代わりに君臨した“天”^{そら}の属区が、全ての属区を監視するという表面上のこともあり、それぞれの区切りが重要とする水の属区の間人間が言いそうなことだった。

「はいストップ、ストップ。まずはあなたの名前からね？」

「意味の分からない言葉を使わないでください。それと、あなたの名前も聞いていません」

「ストップ」という言葉が、登録されていない為、翻訳されず、どんな言葉なのか分からずに苛々と耳飾りをいじりながら、機転を利かせてセイルの名前を聞き出そうとする。

「俺の名前？ あんたのが先。理由は簡単、質問を投げかけたのはあんだだから」

人差し指で指し示された水属区の男は、やれやれとばかりに頭を軽く振った。

子供のわがママを冷静に跳ね除ける親のような態度に、苛々とするセイルに、男はあっさりと自分の名前を名乗った。

「シオン・カイです。どうぞ、次はあなたの番ですよ？」

あまりにもあっさりとしすぎて拍子抜けしたが、セイルは自分の言い出したことに責任を持つことを優先させた。

「俺はノズミ・セイル」

シオンの深海の瞳と、セイルの暗闇の瞳がぶつかり合い、どちらともなく視線を外した。シオンの興味は双子の方へと向かい、セイルを意に介してはいない。

「そちらの双子は？」

「あ、あの……」

「この子はスーシン、あたしはシンスウよ。2人とも風属区の間人よ、それで？」

余計な詮索は避けたいがために突き放すように自己紹介をしたシンスウに、シオンは不快感を抱きもせず率直な疑問を口に出した。

「風属区の間人は土の力も使え……」

「詮索は無用、それはどこの属区であれ言えることだったと思うけど？」

違う属区の間柄に対しては絶対的に不干渉を求められる。それを破って物事を聞き出そうとするシオンを咎めるが、セイル自身もそのことが気に掛かっていた。属区の間人は自らの住む属区の間力しか仕えない。その法則を無視しているシンスウのことが気になった。

しかしセイルは、自分もそうなのだと意識してはおらず、シオンの質問が、自らに向けられていたことに気付いていない。

シオンの問いかけから話題をずらすために、セイルは自分たちの眠っていた睡眠室と、まったく同じ構造の建物を見回した。発見したのは通路と部屋を繋ぐ境目のところ、長方形に開いている空間の

少し上に、何かで強く深く彫られた字。

「S - 004? なんだ、あれ?」

「えすの零零四と読むのですか、あれは」

妙に感心したようで彫られている字をしげしげと眺めるシオンの横で、セイルは逆に知らないことを不思議に思っていた。“外”の言葉は必要最低限でも覚えるはずだと思いついていたからだ。実際属区の間人たちは“外”のことを嫌い、断絶している為、一切の関係のない鎖国状態であった。

そのことを知らないセイルは、むしろそちらの方がおかしいと言つてやりたくなつた。

「……せ……」

アギラの声に真つ先に反応したのはセイル、次にシオンだった。双子は、つい先刻のアギラの怒りを思い出し、部屋の隅で身を寄せ合つて様子を見守る。

ここは任せてください、シオンがセイルの前に立つ。この場で暴れられては後に面倒ごとを残す羽目になる。

「アギラ、気分はどうですか?」

「悪いに決まってるんだろ。セイルは、どこだ?」

背の高いシオンの後ろにいる姿を、寝ぼけたままの目はうまく捉えられていない。シオンが、寝ぼけ任せにアギラから何か聞けるのだろうか、悪戯心にも似たものが湧く。

「……アギラ、あなたは彼女のことを“裏切り者”と呼んでいますが、何について…裏切ったのですか？」

聞ければ対処法も変わる、シオンの思考を読み取ったセイルは、できるだけ身動きをしないように息を潜めた。当てはまる記憶の多いセイルとしては、アギラの怒りの原因を知っておきたかった。そうでなければ理不尽だと思い、いつかは彼を倒してしまうと予測していた。

今にも泣き出しそうなスーシンを宥めながら、シンスウはいつでも力を発動させられるように準備をしている。

「あいつは……宗主になる予定だった。俺よりもずっと扱いは良かった。女になんか宗主の座を明け渡したくなかった…」

ぽつりぽつりと語るアギラに、シオンは口を挟まず、最後まで聞こうとする態度を示す。宗主。それは属区の長たる者を表す言葉。宗主の血を継ぐ人間がセイルだと知り、シンスウは部屋の片隅で知らず、緊張した。

「だが、あいつは強かった……俺も、その実力は認めていた…だが！ あいつはいとも簡単に宗主の座を捨てて、属区を“抜けた”！」

何故だろう、鼓動が妙に早く脈打つ。シンスウは、その言葉の意味することに重い圧力を感じると、意識を失った。スーシンも、それに共鳴するかのようになり、倒れてしまった。

倒れる音は、存外にも大きく、アギラの意識は自然と双子のいたほうへと引き寄せられていた。それを知っていながらも、セイルは双子の方へとわざと足音をたてて近寄った。

「お前……!!」

アギラの全身から発せられる憎悪を受けながら、セイルは苦笑するしかなかった。彼の真つ直ぐすぎる性格が、嫌いではなかったから。

未来に來ても、鎖は錆び付かない、強固なものだと知った。

第二期 出会いの中（前書き）

変換ミスを見つけたので修正しました。

第二期 出会いの中

「一体全体どうしたって言うんだ。何があつてこうなるんだ。え、答えは自分で考えろって？ 知っているさ、そうするよ。」

「や、久しぶりだね、アギラ」

苦悶の顔で意識を失っている双子を両肩に担ぐ。

セイルは、烈火のごとく怒りを燃やすアギラに軽々しい対応をとった。

「消えろ……俺の前にその面をさらすな！ 一族の恥さらしがつ！」

シオンは止めに入る気はないという意思表示のため、一步後ろに下がった。

自分とは関係のない、他の属区の問題だ、口を出すにはそれなりに事情を知っている必要がある。知る気もないし、知ろうとする理由もないシオンは、ただ黙っていた。

「そ、んじゃ俺は出てくよ……それでいいだろ？」

あまりにもあつさりと引き下がるのだな。シオンはそう思ったが、アギラの反応があだから、仕方ないことだろうと納得した。

アギラも、早々に撤退し始めたセイルから視線をはずし、シオンを睨み付けた。

当然の反応だろう、シオンは怒られるのかと思うと、面倒だなと思う。どちらにしろ属区は正反対、つまるところ敵なのだし、今別れてもおかしくはない、どうせなら、今この男と別れるというのもひとつの手だ。

しかし、アギラの反応は違った。

「今後、二度とあいつをここへは入れるな、いいな？」

ただ念を押し、アギラはもう一人の男がどこへ行つたのか聞いた。

「トウチですか……確か、彼は外へ行つて……」

そこで、重大な事実にはシオンは気がついた。

シオンとアギラと目覚めてからの付き合いである少年 トウチ・クーウェイ は、属区にこだわりのない、珍しい人間だった。ただし、そのせいか略奪者たる天の属区を憎む気持ちは人一倍だった。地の属区の性質は温厚柔和。

彼は熱血が入ってはいるものの、情に篤い。そんな彼がもしアギラが少女と、幼い小女二人を下手をすれば死んでしまう極寒の地へと放り出したと知ったらどうなるだろうか？ もしも、極寒の地へと放り出された彼女たちをクーウェイが救出してしまつたら？ 想像は尽きないが、無いとも言い切れない。

セイルたちは出て行つてしまった、呼び戻すにもアギラの不信を買う。

しかし、それがどうだと言うのだ？ 他の属区の間人など関係ない。思考を打ち切つて、シオンは自らの眠っていた装置に近寄つた。外の状況は相変わらずよくはならない、相反する属区の間人ともいるのも、もう限界だ。抑え付けていた不快感が、不信感とともに頭をもたげ始めた。

「少し……外に出ます。クーウェイに彼女たちを会わせるわけにはいかないのよ」

できるだけ自然に、そして装置の中に入れていたものを取り出す。

着物。流れる水を思わせる青と、水色の組み合わせで作られたそれを、現在着ていた藍色の着物の上に重ねて着た。愛読している書物は、状態が悪くしたくなかったので、置いていくことにした。

一言、シオンはアギラに棒読みの礼を告げた。
アギラはもう、何も言わなかった。

×××××

「どづいづ……ことだ……？」

さっきまでここは極寒の地だったはずだ。

なのに、何故……

「こんなに暑いんだあぁあつ?!」

外は太陽が、うざったいほどに照りつけ、降り注いでいた雪はすでに融けきり、蒸発してしまっていた。

地下にいた間に、いったい何があったと言うのだろうか?!

冷え切って白かった吐息が、今にも湯気を吐きそうな勢いだ。

熱中症を起こしてしまったら面倒だ、特にこの幼い双子を連れているとしたら、どこか影のある場所を早急に探し出さなければいけない。

「どこか、どこか……あそこだ……あそこなら……!!」

遠くに見えた屋気楼のような大きな球状の建物。

属区の人間たちの造れるはずもない形のそれは、おそらく自分たちよりも高度な技術を持った外属の人間が造ったものだと、即座に分かる。

何故そんなものがあるのか、そんな疑問はどうだっていい。

汗が流れきる前に、体内の水分が尽きる前に、そこへとたどり着ければ、後はどうにだってしてやる。

「行こう」

戻れる場所なんてないんだ。

後悔しない程度に頑張るさ。

×××

結果的に、俺はそれが正しいと知った。

「幻……じゃなくて、よかったああ……」

足が悲鳴を上げている。

へたり込みそうになる足を叱咤して、目前に迫った球状の建物を目指す。

「ノズミお姉ちゃん、大丈夫？」

背負われたままの、シンスウが聞いてきた。

スーシンは未だ目覚める様子がない。

「大丈夫、調子は？ 悪くない？」

「悪くないよ、それより、ノズミお姉ちゃんの方が……」

分かっている。

脱水症状を起こしかけているなどというものではないことを、意識せずとも分かっていた。妙に体は熱っぽく、口の中も唾液が粘りついて不快だ。

体力が続くかといえば、絶対的に「無理だ」と答える。理由は簡単、自分の体はすでに地面へと抱きこまれていたからだ。

「あえ？」

意識が朦朧としてきた。呂律も回らない。

シンスウが叫んだ気がした。

助けを求めているのか、それともただ俺の名前を呼んでくれているのか、いや、そのどちらでもなく、自らの妹の名前を呼んでいるのかもしれない。

黒い影が、日光を遮った。

双子のものではない、もっと大きい影だ。

体は動いてくれる気配を見せてはくれない。

「どうかしたか！？ 熱中症か？ それとも脱水症状か！？」

やけに耳に響く声だ。

頭に響く声に、頭痛が起こされるのと同時に、意識は熱くも寒くも感じさせないようにすべての感覚を遮断させた。

×××××

冷たい　　そうセイルが感じたときには、視界がはつきりと広がっていた。

「シン姉……お姉ちゃんが…起きたよ！」

視界ははっきりしても、頭はそうもいかないようで、呆けたように辺りを見回しているセイルが、額から落ちた濡れタオルを手に持った。

体に力が入らないので、セイルはスーシンに手を貸してもらい、起き上がる。

シンスウと大声で会話していた少年が顔を向けた。

「起きたか！！ どうだ、体の調子は悪くないか？ どうだ！？」

妙に特徴的な話し方だ。

やかましいことこの上ない。そんな感想をセイルは抱いた。

「もー大丈夫でっす……ところで、あんた、誰？」

「すっごいうるさい」正直な感想も言ったのだが、セイルの言葉は少年の笑い声の前に消えた。

「俺はクーウェイ！ 建物の前で倒れていたのを見つけたのも俺だ！！」

あまりにも当たり前な言葉に、セイルは呆れるしかなかった。セイルの近くに寄っている双子も、苦笑を隠せない様子だった。

クーウェイと名乗った少年は、薄汚れた麻の袋から透明な細長い容器^{トル}を差し出す。

中の液体が小さく音を立てた。

セイルは数秒ほどそれを凝視すると、ふたの部分に手をかけて、ひねった。

ぱきりと音がすると、そのふたは簡単に外れた。容器の中に入っている水を、セイルは警戒もせず、一本丸ごと飲み干した。

「ふー……生き返ったー……」

「おおっ?! その容器はそうやってあけるのか!!」

声が無駄に大きく、うるさいのでセイルは容器のふたを閉めると、クーウェイの顔面目掛けて思い切り投げつけた。

体の横にまっすぐに伸ばされていたクーウェイの手が、次の瞬間には拳を振り終え、容器の中にかすかに残っていた水滴が光に反射した。

高速の拳に、セイルだけでなく双子までもが息を呑んだ。

刹那的反応の際に見えた茶色の瞳は、真剣そのもので、寒気さえ感じられた。

スーシンは素直に感心していたが、シンスウは素直に感心できず、自分の心の中に引っかかった事柄を聞いた。

「お兄さんの名前は、トウチ・クーウェイじゃない……かな？」

「ん? よく分かったな! 何故苗字が分かったんだ?!」

双子の姉に、名乗ってもいない苗字を当てられたクーウェイは、驚きながらも関心を示していた。

シンスウは、やかましさを苦笑で受け流した。

「あなたは有名だから」

「そんなに有名なのか! 俺は!!」

大きな声の中に、嬉しさが混じっていたのは、会って間もないセイ
ルでも簡単に感じ取れた。

クーウェイの機嫌がよくなっているところで、セイルは立ち上が
った。

気絶して、セイルが寝かされていた場所は建物の入り口付近、外
へ通じる硝子の扉は、割られていたが、かなりの厚さがある。クー
ウェイが叩き割った硝子の厚さは、目測だが一寸はある。

かなりの馬鹿力か、それが彼の能力なのか、セイルには分からな
かった。

「あんだ、驚かないんだ？　ここを、見て」

「……その発言に対する反応は返せないな！　お前は天の属区だろ
う！？」

実際のところ、クーウェイはただはったりをかけただけだったが、
混乱してしまっているセイルは気付かずに、セイルは表情を制御で
きず、顔という感情を表すものに、素直な言葉を表してしまった。

気付かれたっ　？！

驚きのまま双子を見れば、小女は互いに身を寄せ合い、怯えてい
る。

「俺はどんな属区でも気にはしないが、天の属区だけは別だ！」

「そして、その表情が証拠だ！　一応助けはしたが、もう手助けは
しないっ！！」

完全なる拒絶に、セイルは一種の潔さすら感じられた。

下手に怖がられるよりは、そちらのほうが幾分か気が楽だった。

「の、ノズミお姉……ちゃん……？」

明らかに変わる反応に、セイルはくだらないと鼻で笑っただけだった。

天の属区は明らかなる異端と教えられているのだから、当然なのだろうと一人納得したセイルは、早々にこの建物から出て行こうと扉の前へと歩いた。

『ガガ……ピ……ッ……！』

機械の音。

咄嗟に後方へ飛んだセイルの目の前に突き刺さるのは、先端が鋭く尖った、矢の鏃を細長くしたようなものだった。

殺傷能力の高いそれを、矢に使わず、そのまま武器として使うなごとも思えないことに気をとられているうちに、同じように凶器が飛んでくる。

クーウェイか、双子がやったことかと思われたが、3人はただ炎天下の中を歩いてくる水銀色の人型を見つめるだけだった。

「昼日か?! いや……違う、あいつじゃない……逃げろ、お前ら……！」

このまま固まっていれば殺されるのは確実、セイルは怒鳴った。

一番初めに動き出したのはクーウェイだった。セイルの言葉に従ったのではなく、両拳を構え、得体の知れない化物に向かっていった。

クーウェイと水銀色の人型の距離は、一気に縮まる。

右拳を化物の顔面に向けて繰り出しながら、左の拳を腹部へと向けて繰り出す！

水に手を突っ込んだような音がして、形が崩れ、その異様さにク

「ウェイが嫌悪感をあらわにした。

「シンスウ！ スーシン！！ 尊い犠牲を無駄にするなっ！！ そ
つちから裏口へといけるはずだから、行きなっ」

セイルが示したのは緑色の看板に、人が扉に向かって走っていく絵
が描かれていた。

忌まわしき属区の人間の声に耳を貸すべきかと、迷いを見せてい
たが、弾かれたようにシンスウは妹の手を引いて走り出す。

双子から視線をクーウェイへと戻したセイルは、その姿がないこ
とに目を見開いた。

目を凝らして、それでも見えない。

「どこへ行ったんだ」

まさか、敵前逃亡などありえないだろうが、クーウェイの姿がない
と見ると、本当なのかもしれないと思ったが、水銀色の人型の大き
さがおかしい。

建物内が損傷するはずがないと知っていながら、セイルは一応外
へと出た。

水銀色の人型を観察する。

何故か、内側から外へと動いている。

「さて、どうする、俺？

1・そのまま放置

2・助ける

3・水銀色の人型ロボットに加勢」

真剣に悩んでいると、水銀色の人型はクーウェイを吐き出した。体が妙にてらてらと光っているので、触りたくはないと感じた。

次の標的はセイルに絞ったようで、水銀色の人型は鈍く光を反射しながら、形を変えた。

変身した水銀色のそれは、今度は巨大な砲台を自分で形作った。光が収縮、狙いをセイルに定める。

「かかってくるのか……、俺は容赦はできない。理由は簡単、貴様を跡形もなく……」

言い終わることを待とうともせずに、巨大な砲台は水銀色の弾を撃ちますが、明らかにスピードが遅い。避けることなど、簡単だった。

「哀れな貴様に、“何者にも囚われぬ天の意思に従い”死という名の安らぎを」

あまりにも遅い弾は目前に迫る。

言葉を発するセイルが目の前に差し出した右手と、砲弾の間に、波紋が生じた。

生じた波紋に、砲弾が水銀の鈍い光に変わり、辺りに飛び散る。

「散」

波紋が飛び散った水銀色の液状物を包み込み、風に溶け込ませた。

機械音の悲鳴が耳障りだった。

早く消えて欲しい声に、「散」と再び発した言葉に力がこもった。

「どうして……機械が……？　ここは、もしかして……」

太陽が射るような光を放つ空を、セイルは見上げた。

星に似た形をするこの国の中央と、頂上部は、セイルたち天の属区の人間の領土。

天の属区のみが、異国という忌まわしい知識をもってして建てることのできた巨大な塔。上空から見たとしたら、星型に近い塔は、右側を赤色で塗り、右斜め下を緑色、左斜め下は茶色、左側を青色で塗ってある。

属区ごとに、目印となるようにしたのだ。

途中、水属区から派生した氷属区ひょうじゅくと、炎属区から派生した雷属区らいじゅくの出現により、塔の右側は下半分を紫色、左側は下半分を水色に塗り替えられた。

セイルが見上げた天属区の塔は、赤色と紫色で塗りつぶされていた。

ここは、天属区の外。つまりは外属から隔絶されていたはずの炎属区えんじゅくだった。

「ありえ、ない……外属ロボットの“もの”がここにいるはずがないっ!!」

絶叫は乾いた大地に消えた。

セイルはただ呆然と、汗が全身を濡らす不快感を感じるまで、その場を動くことができなかった。

隔絶された世界に入り込む異端の原因を知るために、何を考え、何をやるのだろうか。

第二期 出会いの終（前書き）

誤字を修正しました。

第二期 出会いの終

さ、戻ろうか？ 自分の、居場所に。

「また……!!」

天の属区の領域に足を踏み出したころには、天候はまた急変し、雨は降らないというのに雷ばかりが落ちていた。

轟音と、閃光。

避雷針は外属の文化ならばある物。天の属区外であるこの場にあるはずもなく、いつ自分の間近に落ちてくるのかと、セイルは冷や冷やとしながら天の属区へと向かっていた。

雷にあたったのか、機能をショートさせたロボットやらヒューマノイドやらが、転々と転がっていた。ロボットならばいい、しかしヒューマノイドはどうも人間の死体のようで、気味が悪かった。セイルは、自然と足を速めた。

機械人形たちの隣を進むと、小さな駆動音。おそらく自己修復機能だろうと推測し、回復してしまう前に走り抜けた。

何十回目かの雷鳴。

いったいこんな異常気象を誰が起こしているのだろうか。

人の手では無理だ、ここまでの影響力を持つ能力者は、各属区の当主か、次期宗主候補くらいのものだ。

「つまりは、俺もそうなんだけどね……さすがに、火の海にするわけにもいかないし」

当たり前のように、炎属区が扱うのは火炎で、水属区は水波のよう

に、属区によって使える力は固定される。それぞれ能力の違いは出るが、飛びぬけているのはやはり当主と、そうなるに相応しい能力を持つ同じ属区の間、継承の際には属区ごとの“やり方”というものが、それに従い強い能力を持つ人間を次期宗主とするのだ。うろ覚えではあるが、セイルは知っていた。

雷属区は継承者の儀式で、劣った能力者を、死ぬまで幽閉し続ける。外属で言う、“終身刑”と同じだ。違つとしたら、その刑に処されるのが、これもまた外属で言う“無罪”の人間だ。

「弱肉強食うーってやつ。な、昼日？」

背後に近寄る気配に、セイルは気軽に話しかけたつもりだった。実際は、脅しかけるようだったが。

『久しぶりでス。セイル様』

言語機能が少しおかしくなっているらしい。女性の音声に、男性の声が混じっているようだった。

礼儀正しくお辞儀をした、昼日と呼ばれたヒューマノイドは、セイルの個体認証を密かに、素早く終わらせ、本人だと確認できると自身の警戒モードを解除した。

「や、久しぶり。“城”にいるかと思つたよ」

『あなた様の姿を見つけたからでス』

「属区の間に見つかる面倒なことになるよ？」

『それはありません』

断言する声に、雑音は混ざっていない。

セイルが疑念を口にする前に、昼日は背を向けて歩き出していた。長い間手入れのされていない服は、ところどころが劣化、風化し、

人工皮膚をさらしている。風化した状態は、偽装することができない、どれだけの時間が経ったのだろうか、未だに未来に目覚めたなどと白昼夢めいたことを信じてはいない。

唯一、おかしい点を指摘するとしたら、やはり別の属区の間人が馴れ合っていることくらいだった。

「何か隠しているな？」

『あなた様にスケつとをして、いたadakiたいのです……』

唐突に、気が付いた。

声が不自然なほどに雑音に変わる、その規則に。

「こつち、向け。昼日」

無言のままに振り向いた昼日の表情は、漂白されたように無垢な瞳をしていた。

「刹那の間だけ、それで終わるから」

言いながら、蔦の紋様が腕まで広がった手を、真っ直ぐに伸ばし、記憶装置が組み込まれている腹部へと、炎をまとわせて刺し貫いた。抵抗をしようと頭を握りつぶそうとしていた機械の腕が、力が抜けてセイルの顔面を撫でた。顔には、薄く赤い痕がついていた。

下手をすれば死んでいたというのに、思ったより冷静な自分を、若干軽蔑しながら、セイルは肘のあたりまで貫通させた腕を無造作に抜き去った。

手の中で燃え尽きるそれは、属区の間人たちの技術では作れるはずもない制御装置^{チップ}。昼日は、これに思考を奪われ、護るはずの塔から出てきてしまった。

蔦が肩の辺りまで侵食。締め付けるような痛みを与え、セイルの

腕が悲鳴を上げる。

「痛く……ない、痛くないっ!!」

現実逃避にも近い言葉を繰り返すセイルに、膝を折った昼日は反応しない。

自己修復機能を、腹部の大穴に集中させているせいだ。人工的に作られた瞳は、虚空を漂っている。

「う、ぐ……っ!？」

刺すような痛みは、今や腕を万力で挟まれ、限界まで締めたような痛みに変わり、セイルは気絶をする寸前だった。叫び声も出ない、いや、出せないほどの痛みが変わっていた。

「セイル様、大丈夫ですか?!」

わずかに残された映像機能が、セイルの異常を感知。主要の回線だけを緊急でつなげ、昼日はセイルの悶絶する原因を即座に解析、要因とされる蔦を取り除く方法を検索した。

しかし見つからない、結果は何度も“不明”としか反応してこない。

声にならない叫びばかりを漏らすセイルの腕からは、蔦が圧縮されたように小さくなっていくので、昼日はサンプルとして、正気を保てていないセイルの、蔦の残る皮膚の薄皮を採取した。

幻痛ならば、意識を引き戻せば対処はできるが、セイル本人は完全に幻痛に捕らわれて苦しんでいる。

「それは幻痛、幻痛なんです！戻ってきてくださいっ!!」

セイルは必死に呼びかける昼日の人工皮膚を、痛みから逃れるためなのか、破けるほどに爪を立てて、掠れた呼吸音を漏らした。

正気を失った瞳は焦点を失い、落ち着きなくそこかしこを漂い、瞳がこぼれてしまいそうな勢いだった。

痛みから逃れるために、自分の腕を掻き毟って血を流すよりはいい、だが、昼日は焦った。

早く幻痛だと気付かせなければ、危ない。

昔、目隠しをした人間に、これは焼けた鉄だと言い、皮膚に当たると、そこに水ぶくれができたように、幻痛を現実の痛みと倒錯させたままだと、命までも失いかねない。

「ぜつ……あ…っ!!」

『我が苛烈ナル炎ノ意思ニ従イ!!』

炎属区の、能力を使う際に立てる、誓いにも似た言葉。

ほぼ吐き出すだけになっていた酸素を、セイルはゆっくりと取り込んだ。幻痛が、嘘のように引いていった。

『……大丈夫ですか、セイル様?』

深呼吸を繰り返し、おかしいほどに跳ねる心臓を、無理やりに押さえつけた。セイルは爪を立てた昼日の裂けて、血液にも見える液体オイルを流す人工皮膚を撫でた。

「ごめん……もう、大丈夫……いったい何だったんだ、あの痛み……」

口の端を伝う泡をふき取り、自らを落ち着かせる。正気を取り戻しはしたが、セイルの思考はまだ正常に戻ってはいない。

深呼吸をしたといってもまだ息は上がっている、セイルの背中を

優しくさする昼日の手には、無機物の冷たさはなく、人体の温かみがあった。

背中に触れた手のひらが脈拍をとり続け、平均的な状態に戻ったところで昼日は手のひらを離した。

『落ち着きましたか？』

「うん。ありがとう」

『私も言わなければいけませんね、ありがとうございました』

「お互い様、って奴。さ、行こうか、“城”に、ね……」

雷鳴も遠のき始めている。

異常気象もまた、別のものに入れ替わろうとしているのだ。異変が目に見えて現れる前に、昼日はセイルを気遣いながら、足を速めた。

×××××

“城”の外観は、誰かの能力の残滓が残っているのか、古くなった様子は見えない。

内装はそこまでもいかなかったらしく、ところどころに崩れた土くれが床を汚していた。

昼日が外属から伝えた機械は、すでに電力が供給されていないために、ただの鉄の塊と化していた。ここに、誰でもいいから雷属区の人間を連れてくる必要がある、セイルは、すでに機能しなくなった侵入者用の、罨のある位置を確認しながら、一階の中央で歩く足を止めた。

「どれだけの時間が経った？ これは集団で見ている夢じゃないか、その可能性を考えた……理由は簡単、だ。ただの現実逃避。だけど、これは現実で、誰も、残っていないんだな……」

天の属区の長をしていた男の顔が、花火のように現れ、一瞬にして消え去っていった。セイルは、天井を見上げ、昼日から聞いた外属の物語を思い出した。

「ここは、バベルの塔のようにはならなかったんだな」

『“彼”は、空を目指すほどに、おこがましくはなかったからでしよ』

「ここには、誰も残っていないのか？」

『ええ……確か、二階に共同墓地としたスペースがありますが…』

言葉を切り、セイルの意思を汲むという態度を昼日はとった。

「行くよ、せめて手ぐらい合わせてやりたいからね」

まだ、これは夢だと思いたい自分が、「現実を受け入れに行け」そう囁いた。

昼日に誘われるままに、セイルは踏んだ先から崩れていきそうな階段を、一段一段踏みしめていった。落ちたくないのか、このまま踏み抜いて現実に戻るなどという幻想を抱いているのか、セイル自身もよく分かっていなかった。

しっこい、しっこいよ。。。

セイルの頭の中で囁くのは、失った過去の自分。あまりにも冷え切った言葉に、足を止めて消えろと念じる。

頭の中で叫び続ける声は結局消えなかった。だが、昼日が先ほどの出来事で心配をしている限り、これ以上心配の種を増やさせるわけには行かないと、セイルは昼日の背中を追った。

辿り着いたのは、観音開きの扉の、半分が崩れ去り、見る影もな

くした場所だった。

「この先に……みんなが？」

『実のところを言つと、みんな、というわけではありません。子供たちだけ、子供たちだけは地下で、あなた様のお帰りをお待ちしています』

改まった言葉に、自然と目を見開く。昼日は真剣な眼差しで、セイルを捉えて放さない。

俺がいなくなつたら、後は頼むぜ　　！！

記憶に残る“彼”　セイルからしたら10年前　　が、大人がいたというのに、セイルに掛けた言葉。

何でそんなことを言うのかと尋ねた、あの頃を思い出し郷愁に駆られた。

「……それらしくしたほうがいい……のかな？」

『それは、あなた様にお任せいたします』

ヒューマノイド
機械人形本来の硬質な声が返答する。

従者を思わせる昼日は、セイルの言葉を待っている。今後に左右しかねない決定を、他人に決めさせるわけにはいかないからだ。

「仕方ない、元に戻すよ。あいつに、一瞬のためらいを生ませやすいし、な……」

『アギラ君のこと、でしょうか？』

彼女が「あいつ」と呼ぶのはただ一人、炎属区の少年しかいない。セイルは、聞き返す昼日に意地悪く口の端を吊り上げて、笑った。

『一瞬のためらいとは、どういう意味ですか』

同じ属区にいたことを知っているだけあって、昼日は疑念を抱かずにいられなかった。

再び、セイルは笑う。今度は、悪意をこめた笑いだった。

「一瞬の隙さえあれば殺すには十分だろう、なあ、昼日？」

油断をさせるために作っていた表情をはがしたセイルの声は、闇を含んだ、厳格なものだった。

「敵には容赦する必要はない。私の、いや、あの人の残した場を守りたいからな」

『……行きましょう』

“彼”について言いかけた言葉を飲み込み、昼日は崩れかけた扉を押しした。

完全に崩れ去り、砂と埃が交じり合って舞う場を、すべての埃が落ちる前に、それを踏み潰すようにセイルは昼日の横を通り過ぎた。

「ただいま、帰りました」

汚れた床に膝をつき、何もかも感情を押し殺して、自らの帰りを告げ、そこで顔を上げた。

白骨化した死体が幾重にも重なり、山を作っている。

風化した服は、触ればぼろぼろと崩れ去りそうだ。

誰も彼も、傷はないままに死んでいた。

セイルにとって、それは救いだった。戦って死んだ人々の悲しみや、その親族の悲しむ姿を幾度となく見せられたからだ。

だが、折り重なって誰かの来訪を待つ骸骨たちの中、輝く物をセイルは見つけた。

立ち上がって、白い山に近づき、隙間からうまく手を突っ込み、輝いていた物を取り出そうとしたが、一緒に小指がついてきた。

細くやつれた跡がある小指にはめられていたのは、青瑪瑙に似た石のはまる指輪だった。

「ぞくせき属石……水属区のものか」

色で分かった。セイルは、天の属区にやってきた水属区の間人を思い浮かべたが、大人ばかりで、大人は全員指輪をはめていたので、分かるはずもなかった。

属石の発動条件は何だったのか、鮮明でない記憶が幾つも重なるので、昼日のデータベースに頼ろうとし、昼日の名を呼んだが、返事が返ってこない。

見れば、昼日は脆い壁に寄りかかり、自らの体を修復していた。機能を停止し、光を失った瞳が、無機質にセイルを観察した。

気を遣っているのだろうか。とにかく彼女の修復が終わるまで、セイルは声をかけないことにした。

「仕方ない」

言いながら、能力を使うときや、戦うときの誓いの言葉を、属区ごとに思い出していき、水属区の誓いを口にしてみた。

「我が清冽なる水の意思に従い」

それが正解だったようで、指輪は淡く発光し、ぼやけた女性らしき輪郭を作り出した。

思念を残す指輪は、能力が使える人間でしか作れない。だから、

この女性らしき輪郭は成人していると断定できる。

お帰りなさい、セイル。

あなたが来たということは、私はもう死んでいるわね。

ぼやけた輪郭が、顔だけでもはっきりさせようと足の辺りの輪郭を消している。

「分かって、いたのか？」

思惟しか残さない女性に話しかけてみても、返答など返ってくるはずもない。

だが、思惟のみとなった女性は、セイルがどう受け答えしてくるのか分かっていた。

私を受け入れてくれた“彼”が、あなたたちを眠らせた後に教えてくれたのよ。

女性の輪郭が、しつかりとしてきた。

「スイレン……なのか？」

小声だったが、その問いに答えてくれもしない女性は、ただ微笑んだ。

私はあまり力がない大人だから、あまり言葉を残せないの、無駄話しちやっただかしら？

子供っぽく笑うスイレンは、属区の中でも下から数えて5本の指に入るということを、いつも笑って話していたことを思い出した。

セイルはこの女性がもう笑いかけることもないと思うと、何故そうなってしまったのか、何がそうさせたのか、そうさせた原因に対して、強い怒りを感じずにはいられなかった。

とにかく。私が言いたいことは2つ、1つは……ノ……イ

この世にわずかに足をつけていたスイレンが、どこか遠くの地へと引っ張られ始めた。

姿が少しずつ不鮮明になっていく。

触ったら、崩れてしまいそうだ。

「待って」と出かけた言葉も、どちらにしろ無効にされてしまうのだと、セイルは口を引き結んだ。

を、つけて。2つ……は……

声がつましく聞き取ることができない。

セイルは、あと少しだけ、彼女が消えるまで、スイレンがすべてを話し終えるまでもってくれと願った。

願いは通じたのか、それともスイレン自身が最後の言葉に力を注いだのか、輪郭は完全に生前のものとなり、今はもう見ることできない笑顔を見せた。

私の指輪、持っていて頂戴。ありがとう、と……

我らが水の加護を。

それで、最後だった。

何があるとも他の属区に与えてはいけないとされる加護の言を、与えたのならば死にも近い罰を受けるそれを、スイレンは与えた。属区という重石は、彼女の背からはすでに取り払われていたのだ。た。

彼女の思念はすべて消え去り、跡形もなくなった。スイレンがいたはずのそこには、青く輝く指輪が落ちていた。

セイルの足元に積もっていた埃が、黒い染みをつくった。涙ではない、数秒後に埃と一緒に固まったそれは、赤黒い塊になっていた。指の腹の部分を口で噛み切った。セイルは、指から流れる血を、捨われることを待っている指輪の上に垂らした。

血を弾くことなく吸い取った指輪は、変色し、青瑪瑙に似た色をした石は、炎属区を示す赤に変色した。

「我らが、天の加護を」

炎属区の名を語ることを許されないセイルは、それでも炎属区にいたという痕跡を残すために、属区の色に染めた指輪を埃の中から掬い上げて、高く掲げ、目を閉じた。

涙は出ない、出すことすら許されなかった過去が、今もセイルを抑制している。

いつからそうなったのか、思い出すためには気を失うほどの頭痛と戦わなければいけない過去を、セイルは思い出すつもりはなく、ただ、死者のために祈りを捧げた。

「彼女に」

「彼女に……冥福を……」

何故、あなたは笑うのだろうか

何故、あなたは死を受け入れたのか

何故、私たちを残して行ってしまったのだろうか

あなたは、どこへ

第三期 塔の始

鮮明ならざる光でも、闇の中では、道を照らす松明にも等しい。

「昼日、少し私は出掛けてくるよ」

大丈夫。この塔の中を見てくるだけだから。そう言い置いておけば、私がいなくても困らないだろうかと思つたが、今は機能を完全停止させている。少しは期待したが、それは自らの見た幻想だったようだ。

脆く崩れ去りそうな“城”の、目指すは地下。

昼日の言葉が嘘や間違いでなければ、未だに天属区の間人が眠っているはずだ。だが、助け出したとしても死んだ人々の説明はどうする？ 責任を問われても、私はどうすることもできない。

「何故……何故に彼の人は死んでしまったのか!!」

後悔と自らの無力さに嫌気がさす。

あの人がいたのならば、今さら悔やんだとしても、時は後悔するには長すぎる程に遠く、過ぎ去つてしまった。

螺旋状の階段を、踏み抜かないように気を遣いながら下っていく。外は、今度は土砂降りの悪天候へと変貌していた。

このような悪天候の中、この“城”が残存しているのは、奇跡にも近いことだと思つたが、ここに住まうみんなの力がそうさせているのだと思うと、胸が締め付けられた。

首筋を撫でたのは冷気。

やはりここも“種”の影響を受けなかったために気温が下げられていた。

あいつらが言う力を使えば寒さなど造作もないことだが、実際は

子供が扱える代物ではない、第一言葉を解し、口に出して初めて言葉が成され、力を借りることができるといつのに。

……寒い、とにかく火の要素を集めよう。

「ゆらり、ゆらりと。寄りて来たりて、踊られよ」

言葉を捧げること、それは言葉を与えその力を借り受けること。私の周りが暖かい空気で包まれた。火の要素たちが私の呼びかけに答えてくれたことに、若干安堵した。

言葉を使わずに発生した火が、無理やり捻じ曲げられたものだと分かっていながら使った。それに怒りを買ってしまったのではないかと心配していた。

今は属区の手言葉は必要がない、私以外の誰にも向けることが出来ないからだ。

「ゆらめく炎よ、道を照らさ……」

『照らせば、いいのだろうか?』

耳元で囁くのは、静かで、大人びた声だった。

聞き覚えのあるその声は、もう聞けないと思っていた。

「フレイ、なの……か?」

『その名前で呼ばないでくれ、俺はその名前は嫌いだ』

ああ、そうだ。彼に違いない、彼は私のつけた名前を嫌っていた。

「私がつけた名前に、文句でもあるのか」

『なければ言わない。それよりも、お前が最初に付けてくれた名前があるだろうか』

「嫌なのか、それは仕方がない……な」

少し残念だ。言葉自体はとても滑らかで綺麗な言だことと思ったのに。しかし力を借り、使役させていただいているこの身では、その名で呼ぶことを強要することは出来ない。

私が最初につけた名前も、嫌いではないからいいが。

「雀螢さくけい、今までどこにいた」

私だけに許された真実の名で呼ぶ権利。私が聞けば、雀螢は苛立たしげにこちらを見た。

『眠りを強制された。どのくらいの時間が経ったか、お聞かせ願おうか』

眠りを強制された。誰か、雀螢の力を押さえ込めるほどの実力を持った人間からの命令だったろう、想像はついてはいるが、あえては言わない。

「私にも分からない、理由は簡単、まだ状況把握できるほどの情報がないから、だ。でも、この先には知っている人間がいるかもしれないな」

冷気が滞ることなく流れ続けている。しかし、進むに連れて冷気とは正反対の、暖気が流れ込んできた。生温い風が、暑く感じるようになってきた。嫌な予感が頭をよぎる。

部屋に辿り着いた。

目の前に見える外属の文明が作り出した利器が、私たちの同族を、目覚めさせるものがないければ悠久に続く現在いまに閉じ込めている。だが、そこには決定的な違いがあった。

緑色に蠢くそれは、霜の降りかかった硝子を舐めるように滑り、喰らいつく瞬間を待ち望んでいた。

硝子を通して見える者は全員、私の記憶に残っている顔だった。
何一つ変わってはいない。
だとしたら……。

(何故、私を他属区の者と一緒にあそこへ眠らせたのだろうか……)

『俺を使役する者よ』

雀螢が、現実から逃避を始めていた私の思考を、現実へと呼び戻した。

「……何だ？」

『お聞かせ願おう。俺に何を望む？ 何を願う？』

生物の気配を感じた緑色の不気味な“それ”は、私を見つけ、標的としたようだ。

しゅるり、しゅるりと動く様は、まるで蛇。

睨み付ける目はなかったとしても、粘っこく獲物を狙う姿は、蛇といわずに何と言おう。

「敵の、殲滅を」

『承知』

私は願いを込め、言霊を与えるだけ。

ただそれだけ。

彼がいる限り、私に許される行動はそれだけなのだ。でなければ、私は雀螢を貶めてしまふ、それを理解していても、彼が怒ろうとも、見ているのは辛い。

すまない。

心の内では、しっかり謝ったから、許してくれ。

×××××

雷鳴が降り注いでいたと思えば、次は土砂降りの雨。

叩きつけるそれは、もはや凶器と言っても過言ではない。

視界は確保できない、声も雨が土を叩く音で掻き消されてしまう。

スーシンは、姉の手を強く握る。シンスウも、妹の不安を察してか、その手を離すまいと固く誓った。

二人の足では長い距離を進めず、また、雨が進行を妨げるので、未だに炎属区からは抜け出せていない。

天属区の塔を中心として、炎属区の領土を東と基準すると、双子は東南へと向かっていた。そちらは風属区の領土。彼女たちは本能的に自分の属区へと戻ろうとしていた。

「お、おね、シン姉！」

スーシンが声を張り上げても、シンスウは暴雨に気をとられてその音を拾えない。

小女は気付いたのだ。

暴雨に混じる外属の不快な、音に。それは機械の動き出す音。

雷に打たれて機能を停止させていた機械たちが、自らを修復し終えたのだ。

立ち止まり、先に行く姉の足を止めさせた。

「スーシン！ いったい……どうし……」

振り向いた時に視界は泥水に汚染されていた。

どこにも川などないのに、濁流は無慈悲にも双子を引き裂いた。

濁流に飲まれ、体中を木片や石の欠片にぶつけられ、傷だらけになりながらも、シンスウは妹の姿を探そうと侵食する鳶の存在を感じ

じながら、風を喚んだ。

ゴッ　　！！

シンスウの風が掴みかけた小さな存在は、濁流にさらわれた木に遮られ、意識も遠く彼方へと離れていった。

×××

濁流が収まり、ぬかるみの中を歩く存在は、水を従えていた。雨は、彼女の前に跪き、キューノの御身を濡らさぬように、左右に開いた。その側に仕えるは、罪悪感に顔を真っ青にした女の子。

「ユイリイ」

冷め切った声が無感動に女の子の名前を呼んだ。

肩を大きく動揺させ、今にも涙がこぼれそうになるユイリイは、それでもキューノの言うことを聞かなければという強迫観念に駆られ、彼女の方を向いた。

双子や、ノズミがいた頃に浮かべていた笑みなど、片鱗も感じられぬキューノは、泥に塗れ気絶しているシンスウを見つけると、口の両端を吊り上げた。

「殺しなさい」

「え……？！」

予想外の言葉と、その言葉の恐ろしさに、ユイリイは震えが止まらなくなった。

「殺すのよ、今の内に、それとも出来ないの？」

「で、出来な……」

出来ない。そう言いたくても、温かみのない微笑を向けられ、黙りこくるユイリイに、キユーノは左腕から肩まで這ってきた蔦を見、余計な力を使うことは出来ないとして一人確認した。

自らをこのふざけたものなどにくれてやるつもりもない。自分を守るためにも、水属区の道具として遣うためにも、「殺せ」と命じた。

キユーノの放つ言霊は、無情にも力の弱いユイリイを汚染した。

「殺しなさい」

「……ハ……イ」

青く煌く瞳は、光を失い、夢現の状態になったユイリイは壊れた。幼い精神が、直面させられた現実から視線を外した。

足取り危うく進む小女は、手に持った蠟クレヨン絵具を空中に構え、刀を描いた。現実の物として現れた刀は軽く、ユイリイでも持つことは出来たが、切れ味は絶対的に鋭い。証拠に、試し切りとばかりに刃に触れさせた木の枝は、綺麗な切断面を見せ、二つに分かれた。

左足から外へ出ようと凹凸を作り出していた蔦は、膝の辺りまでを侵食すると、もっと上へと進みたいのか、外側への抵抗を試みた。

「さあ」

キユーノが促す。

振りかざした刃が、シンスウを映し出す。

風を切り裂いた刀は振り下ろされた。

「何をしているっ!!」

シンスウの代わりとなったのは土塊の人形。人ではなかった。

声の正体は少年。茶色の瞳は、鋭く小女を射抜いた。

「あ、ああ…… あああああつ!？」

未遂だったとはいえ、人の命に手をかけてしまった自分に、ユイリイは喉の奥から悲鳴を迸らせた。

彼女の声は、水の要素たちの悲鳴に替わる。水属区の叫びに、水の要素が引き寄せられた。

腕を貫通する勢いで降る、局地的な雨。属区を襲う雨が、ユイリイの周りへと無理やりに集められている。

ユイリイの腕の蔦は、行動を見せない。幼い間は封印される能力が、封印を食い破って暴れだしたのだ。

「ユイリイ…… 凄い、これなら…… あの方も!!」

水属区のキューノには雨は降らない、避けるようにしているからだ。その代わりに、蔦の侵食は右肩まで移っていた。年齢的にも、彼女はまだ大人ではない、自分自身の能力は封印されたままだからだ。

キューノはこの際仕方がないと諦め、シンスウと飛び込んだできた男の姿を探した。

辺りを見回してみるが、局地的な雨に視界はふさがれている。音に頼れるはずもなく、シンスウを消すことはまた次回に、とキューノは思考をまとめた。

あと少し、もう少しだけ粘り強く辺りを探したのなら、キューノは見る事が出来ただろう。泥に紛れ、キューノの側を通りかかった、動く、泥を。

咎める人がいない、それは、どれほど不幸で、幸せなのだろう
!!

第三期 塔の中

大変だ、なんて言っていていられる間は、まだ余裕だ。

『いい加減にしろっ！ 何度言ったら分かるのだ、貴様はっ?!』

温い温度を保つ床に正座させられたセイルは、俯き加減のまま、激怒する雀螢の説教に耳を傾けていた。

セイルが参戦したことで、討伐が早く終わったのは事実だが、主を守ることも使役されるモノとしての使命だというのに、その本人に使命を全うすることを遮られれば、怒るのも当然だ。

「だ」

『だが、なんて言葉は認めぬっ!! いい加減に俺に護られる!!』

「理由がない」

『無いとは言わせぬ!』

元はといえば主を護り、敵を倒すことを目的として使役されている雀螢は、自らのみが戦うことこそが役目。主に手助けされるなど、以ての外だった。

型破りな主に怒号を飛ばしても、セイルは肩を竦めるだけでまったく反省の色は見えない。

「せえ………ちゃん……?」

さらに言い募ろうとした雀螢は、少女の声に、瞬時に姿を見えなくした。主だけに、その姿が見えるように。

温い床を裸足で歩くのは、二十歳過ぎと言ったとしても、そのま

ま通ってしまいそうな少女。少し垂れ気味の瞳の中には赤の強い薄紫色が、焦点をあわせようとしていて、せわしない。

「やっぱり、セーちゃんや！」

焦点が合っているというのに少女の瞳は、まぶたの下にはぼ隠れてしまっている。

主へと近づく女に、雀螢はどうしたものかと悩むが、セイルが心中で「手を出すな」と伝えたので、それに従う。

足取りはいたってゆっくり、しかし、セイルからあと二、三步のところまで急加速。

放たれたのは高速の蹴り。

横腹を狙ったその蹴りを避けず、ただ冷めた目で見下ろした。

その蹴りが、寸でのところで止められると分かりきっているといった態度に、少女は表情を一切変えずに、

「酷いんねえ、無粋な横槍を入れさせるなんて、卑怯やわあ」

浴衣のような服から、蹴りを放った素足に当てられるは灼熱。本人の感情に比例した熱に、少女は足を下ろし、あまり変化しない細い目を向けた。

「フレイ、手を出すな、と言っただろう？」

主の叱咤に反論しようとしても、鋭く光る瞳に封じられた。姿は見えないが、そこに何かがあるのだと、シグレは不快な表情を隠しはしなかった。

フレイは、見えていないはずなのに自分をじっと睨みつける視線から逃れるためにも、大気へと紛れ、主から声が掛かるまで、休息することにした。

「悪かったな、シグレ」

「ええんよお、気にしないわ。それよっかここはどこなんか、教えて欲しいんやけど？」

「城の中。地下だ」

地下。

地面の下にある部屋へと、視線をぐるりと回し、シグレはまぶたを軽く動かした。

「誰がここを護ってるん？」

「おそらく、この大人たちだ」

「おそらく？ 何かあったん？」

辺りの状態からして、見たこともないものがたくさんあれば、そう聞くのは当然だろう。

「説明は後にしよう……昼日のほうが詳しいだろう。一緒に来るか？」

「行く。昼日の姉さんあねなら何か知ってそうやからね」

×××

共同墓地に戻ると、昼日はどこから手に入れたのか、花を骸の山の前に供えていた。

属区の要素に影響されて色を変える花は、八つの花弁が一つずつ、それぞれ赤、紫、黄、緑、白、金、青、水色で彩られていた。

どこにでも咲いていたはずの花は、今は何処に咲いているかわからない。

短く昼日の名前を呼ぶ。セイルの声に反応した昼日は、微かな悲

しみの色を表面上から消すと、柔らかな笑みを浮かべた。

『お帰りなさい』

「ああ……シグレが、聞きたいことがあるらしい」

どうして彼女が一緒にいるのか、などと聞くのは愚問だ。

昼日は、シグレの前へと移動すると、人物照会を即座に終わらせた。マクモ・シグレという人物本人だと、確認された。

『おはようございます。私に、聞きたいことはたくさんあるでしょう？ まずは、一つ』

「通り過ぎた時間については聞きやしまへん。あたしが聞きたいんは、ジリュウの兄さんあにがどこへ行らっしゃるんか、や」

不快な雑音ノイズが混ざった声が回答した。

『ソレハ極秘情報二分類サレマス』

昼日が回答したのではないようだ。彼女は呆然としている。博士の残したプログラムの一部だろうと昼日は説明した。

「昼日、パスの設定はされているのか？」

『分かりません。私にはアクセス権すらない事項なので……すいません』

「いや、いい。それよりも、あくせす、とはつまり……？」

『それに問い合わせする権利のことです』

「ああ……お前がこれをいじってくれたおかげで、多少は分かるのだが……な」

セイルが自身の耳たぶに触れれば、複雑な色合いの石が、これも一

体どうやって作ったのか、複雑な形でぶら下がっていた。

「兄さんがいないとなると、セイル。あんたがどうにかして、まずはあたしらん塔に光を燈さんとな」

「……言語翻訳の難しい言葉ばかり使うな、疲れる」

翻訳する際の無駄な雑音が直接耳に入り込むことは、とても疲れるのだとセイルはシグレに言ってみようかと思っても、彼女自身の個性とも言うべきそれを、禁止させるのは自分勝手だと分かっていたため、言いかけた言葉は空気に溶けた。

「ええやんか、こんなあたしだけなんよ？ 個性と言いんしゃいな、個性と」

「そうだな、確かに個性だ……まあいい、とにかく城に光を燈そう」

「城、やなくて塔、やる？」

「……行くぞ」

光を燈すことを、夕闇は待ってくれない。

長い一日に終わりを告げる闇は、もうすぐそこまで迫っている。

『セイル様、シグレ様』

ジリュウの残した移動術が残っている、昼日はそう説明して地下から一階へと上がった。

中央には、黒ずんで効果を成さない陣が描かれていた。

『これです』

「んー、何やこれ、封じが施されとる……あたしにや無理や」

「そうか、そういうことか……」

「解けるん？」

「分からない。理由は簡単、確信がないからだ」

「それでもやってみるんしょ？」

「そうだ」

封じの端々に見えたのは、砕けた属石^{ぞくせき}。薄暗い中でも、それは淡い光を放っており、薄氷を思わせる属石に触れたセイルに反発し、指の先を凍りつかせた。

凍った人差し指をそのままに、炎を思わせる属石に触れれば、凍りついた指の先から溶けて出た水滴が垂れた。

「何がしたいんの？」

「その、紫色と、水色の石は見たことがない。雷属区と氷属区のものか？」

「……一緒にしないでもらえる!？」

自分たちとは別の属区と一緒にされることは、属区での生活が長いものほど不快が高い。

「そうか、では、そちらの石は貴様らの属区のものか？」

言い方を変えてみれば、素直な返事が返される。

「そう。名前は付けられていないんね、炎嵐石みたいやね？」

薄い光にかざせば、燃える赤と光る紫色が光に透けた。

「紫が混ざっている。雷属区の色だ」

「高貴な色とも言われてるんやけど……炎雷石、とも呼ばさせていただきますしよっか」

「字は、どう当てる？」

「赤は炎、派生したるは雷の紫。美しき色合いは正に炎と雷を表すかのごとく、炎に、雷。我ら炎属区より生まれし属区には、あまるほどの名。」

暗闇に、透けていた光は輝きを失った。

振り向く薄い赤紫が、闇の中で赤の瞳を探した。見えるはずがない。

静かな夜へと足を踏み出した。外から微かに入ってくる風は、強く叩きつけてきている。

「何故、一つの属区から派生する属区が生まれたかは知らぬが、ともかくにも光を。異存はないな？」

「ありやせんよお、しつかしどうやって光を燈すん？」

「まあ、見ている……」

×××

八角形の図の内部の角に触れるように円を描き、図の外にも同じように円を描く、八角形の頂点の先には小さな丸が、そして、その小さな丸に触れるように描かれる一番大きな円。

八角形の先にある丸の中心には、砕けた属石が、消えそうな淡い光と共に鎮座している。八角形の内部にある円の中心には、セイルが立つ。

シグレは雷の属石のある円の外から、垂直な場所に立っている。

属石の配置は、炎、水、地、風は塔の色通りに、炎の上の円には雷が、水の上には氷が、そして塔の仮の頂点にあたる部分には無き金属区の属石が、最後に残った円は、天属区の場所だった。

「ホントに、これでどうにかなるん？」

「……お前が、言ったとおりに動いてくれれば、な……」

「信じきることはできへんけど、あたしにやどつにもできんから、あんたに任せる」
「ん」

短い声を出して、小さく頷く。セイルは、シグレに自分の発する言葉を聞こえないように、言霊を使う。対人に影響する言霊は、相手の同意無くやれば危険だが、今回はシグレが今から起こることに同意しているため、すんなりと通った。

「『我が飄々たる風の意思に従い』」
深緑を思わせる色の風啼石が輝きを増す。

「『我が堂々たる地の意思に従い』」
燕が中へと彫り込まれた茶色の岩燕石が風啼石と光の線を繋ぐ。

「『我が清冽なる水の意思に従い』」
青瑪瑙に似た色の水波石が、岩燕石に光を繋げた。

「『我が苛烈なる火の意思に従い』」
炎を思わせる赤の炎嵐石が、水波石へと光を伸ばした。

「『我が堅実なる金の意思に従い』」
黄金の輝きを持つ金狐石が、長い光を発した。

セイルがシグレに目配せをした。
シグレは頷き、属区の誓いを口にした。

「『我が轟々たる雷の意思に従い』」
シグレの髪が紫の光に押されるように舞う。炎雷石の光が、強く炎嵐石と繋がる。セイルはさらに続けた。

輝きの戻らない2つの石に向けて、言葉を向ける。

「『我が冷鋭なる氷の意思に従い』」

冴え冴えとした光を放つ氷牙石ひょうがせきが、水波石と似た色の光を伸ばす。

「『何者にも囚われぬ天の意思に従い』」

属石の中で一番の輝きを持つ空羽石くうはせきが、属石たちと共に陣へと光を満たした。

そこでセイルはもう一度シグレに合図をして、言霊の効果無くさせた。

「天翔てんしょう!!」

光が爆発。天井を射抜き、空へと昇った。

強力な光は、属区の領地を移動する彼らの目にも届いただろう。

八方へと飛び散っていった光は、数秒もすると消えていった。

強烈な光に目を閉じたシグレとセイルよりも先に、昼日が塔内部へと光が燈っていくことを確認した。おそらく、塔の頂上部にも光は燈っている。

目に焼きついた光の点滅が、漸く収まったところで、シグレが突然頭を押さえた。

「痛ううっ!?!」

頭を抱えて床へと膝をつき、進入してくる痛みを堪えようとした。

「ど……っ?!」

セイルも、少し遅れて頭痛に襲われ、ふらついた。

間もなく膝をつくことになるだろうセイルに近づこうとして、昼日は生体反応の無い、“何か”の気配を感じ、セイルよりも、そちらの方を優先させた。

『……あなたの仕業ですか』

昼日が八色の光を見つめながら言うと、そこへ体を光に透けさせた男が現れた。

実体は無い。熱反応も何も無い。映像装置も無い、昼日はそれがこの国だからこそできることなのだろうか、内心で思った。

そうだ。悪かったな、こうしてやるほかに方法が無かったもんでな。

声に、歯を食いしばったセイルが顔を上向ける。シグレは、頭を片手で押さえながら、そちらを向いた。

『何がですか？ 彼女たちを苦しめてまで、何を……？』

責めるような言葉に、男はまるで何を言われたか分かったかのように肩をすくめた。

他の属区との摩擦を減らすためにな、強力な言霊をかけたんだ。一時的であれ、他属区に敵愾心を薄める言霊だ。今、それを解いている。

『解く必要なんて……ないのでは……？』

昼日の本音に、男は苦笑した。

属区同士の争いを知っているからこそ、昼日は摩擦をなくすための言霊を解く必要などないと考えた。しかし、男の考えは違っていた。

そんなことをしてできた関係は偽りだ。少しでも、目覚めた奴らが属区を気にせず協力できたのなら、解いて、それでも協力できたのならば……いいと思わないか？

『そう、ですね』

そうだろう？ だからだ。

昼日が反論できなくなっていると、言霊を解かれたセイルが男に向かって叫んだ。

「ジリュウ！！ 何故私を炎属区へと送った！？」

……お前じゃなきゃ駄目だったんだよ。

「何が！！」

ここを護るのは、お前でなければ……ば……。

塔全体が大きく揺れた。

男の姿は揺れに同調するようにその姿を歪ませる。

嫌な気配に汗が止まらない。セイルは、やっと頭痛の治まったシグレを無理やりに引っ張って、早口に言葉を発して、跳んだ。

昼日は、一人外へと出ていったのが見えた。

×××

「何や、これ」

呆然と、抜け落ちるかのようにシグレが言った。

セイルは、目を見開いて、そして、信じられないものを見るように、“それ”を見た。

属区の領土の端に現れたのは巨大な光の柱。にも見えた。

しかし、それは巨大な硝子で出来た柱で、中には属区の色で満たされていた。水でも入っているのか、そこにある“もの”はゆ

らゆらと漂っていた。

人、ヒト、ひと。

そこに浮かんでいたのは大人たちだけ。ただ、目覚めることも無く、何かを思うことも無く、そこを漂っていた。

「ああ……そう……なのか？」

泣けはしない。だが、その顔は今にも泣き出しそうで、セイルの口は、喜びたいのか、悲しみを表したいのか、変な風に歪んでいた。

何故、どうして……疑問ばかりが浮かんでは、解決できないままに濁り、溜まっていく。

第三期 塔の終

あれに光るは、摩訶不思議なものごとの一端なり。

貴様はどうするのだ？

×××××

「あ……」

漏らした言葉は、何を言いたかったのか。セイルが聞こうとしたときには、シグレは顔を両手で覆って、膝をついていた。

セイルは短く言葉を紡ぎ、遠方を近くで見ると鏡を作り出した。水を介した鏡は、時折水中のような歪みを見せるが、ほとんどが綺麗に写った。

映し出したのは炎属区の領地に現れた光の柱の中。

誰も彼も、セイルには見覚えがあった。

「アズナ、ナギエ、メイコ、マサヨ、カズミ、ヤスオ、アキラ、アガツキ、ナクラ……」

セイルは次々と炎属区の人間の名前を口にしていく。

中には、セイルの覚えている限り、成人していないはずの顔もあった。

すべてに、自分の記憶の中の面影を重ね、セイルは一つ、ふうと息を吐いた。

「全員知っている顔だ……いない、属区の間人もいたが……」

「他の、他の属区……あたしらの属区の柱は、ない……？」

見知った顔でもあれば安心できるのか、シグレは縋りつくようにセイルへと問いかけた。

しかし、セイルは正直に首を振り、水鏡で、光の柱を一つ一つ見せていった。

「あ、ああ、あああ」

声になっていない。ただのうめき声。

髪をかきむしって、シグレは絶叫した。

セイルは、それを見苦しいとも、醜いとも思わず、側にいて、シグレが落ち着くまで待った。

(……土……！)

建物の中であまりにも大きな声で叫ばれた何かに、セイルはわずかに肩を揺らして反応をし、シグレが落ち着いていることに気がついた。結構な時間が経った。

辺りはすでに暗幕をたらし、静寂によってその場を穏やかに見せた。いや、静寂が、逆に不穏だともセイルは思う。

「一雨、来るな」

ぼつりと言った。

それと同時に、一つの大粒の水が建物を濡らした。

あとは、もうなし崩しに、空から大量の、大粒の水が降ってきた。

光の柱は、ほとんどが光を失い、その巨影のみを見せている。

一つだけ。光を放ったままの柱があった。

それは青く、海を思わせる、水属区の柱だった。

「シグレ」

呼ぶ。

「シグレ！」

胸倉を掴む。

「見る！ あの柱を、一度たりとも目を離すな！！」

再び出現させた水鏡は、雨のせいか、無駄に大きくなっていた。

その目の前に立たされたシグレは、ぼんやりとした意識で、青い柱の中を覗き見た。

わずかな変化だが、中にいる人物が透けていく。その際にこぼれ出てゆくのは、柱と同じ色の、砂とも見えるもの。

「ひっ！」

心が弱っているシグレは、すぐさま顔を離し、水鏡から目をそらした。慌てふためき逃げ出そうとするシグレの首根っこを掴んだ。セイルは、そんなことを許していないと、再びシグレを水鏡の前に立たせた。

「やめ、やめえ！！ あんた、あれを見てどうも思わんの？！ 本当に忘れたの！？」

泣きながら、怒りながら、シグレは全然違うことを責めている。

何を？ セイルは混乱した。

「忘れた？ 何を……？」

シグレが、酷く怯えた顔を見せた。その直後に、彼女の周りが光りだした。

力が暴れ始めているのだろう。感情の制御が出来ていない。触れようとした手は、静電気よりも強い電撃を流され、反射的に引かれた。こうなると、セイルにはどうしようもない。

土属区の間人だったのならば、触れることは簡単だろうが、炎では電撃を防ぐことは出来ない。

「あんたは……っ！！ 最低やつ！ 人を殺しといて何言ってる……」
「だからっ！！」

セイルが声を被せた。

「何のことだ?!」

記憶が混濁している人間を相手に、詰問するかのような口調になっていることに、セイル自身は気付いていない。

“殺す”といった類の、人の死を願う言葉は、凶悪な力が宿る。幼い頃より言い聞かされるはずの言葉を言うなどと、天属区になつたからといって、許されることではない。

胸倉を掴み、怒鳴る。

セイルの体へ電撃が伝っていくが、頭に上った血がその感覚を遠ざけていた。

「いや、いやあ、いやあっ……」

子供のよう無駄をこね、首を振り、精一杯の拒絶。

シグレの拒絶に呼応するように、電撃は、セイルの肌を焼いた。

焦げた、人間の臭い。それが自分から漂っていることに、嫌な表情をする。

手を離せば、臭いと共に煙が立ち昇った。
雨が傷口へと入り込み、激痛に変える。

「う……はっ……あぐ!!」

焦げた右腕を押さえ込み、地面へ両膝を突くセイルを、シグレは見下ろす。

「返してよ！ あたしの、返して！」

痛みに声も出ないセイルは答えられず、シグレはセイルの怪我をして、灰色の地面へとついていた手を踏みつけた。

未だ暴走は止まらない。

溜まり始めた水が、電気を通し、セイルの体を、シグレ自身すらも苛んだ。

「返して、返してよお!! あんたが奪っていったんだ!!」

何度も、容赦なく踏みつけられた手が、本人ですら目をそらしたくなるほどに傷ついていく。

癒えるのに、どのくらいの時間が掛かるのだろうか　セイルは、すでに痛みを感じなくなってしまった手を、どこか空ろな瞳で見つめ、急速に冷える頭が嘔く。

壊せ。

動かない右手が、微かに動いたように見えた。右腕が跳ね、炎を従えた腕が人体を貫通。血を吐いて倒れ伏し、水によって流血は止まらず、やがて動かなくなる。

やめろ。

弱弱しく頭を振り、それは妄想なのだと言い聞かせる。

荒い息を吐き、電気を垂れ流す存在を止めるには、どうしたらいい

いのか。セイルは、痺れておかしな風に歪む口から、聞こえづらい声を出した。

みつつなり
三連成。セイルは、自らの体力を考慮し、基礎中の基礎の術を發動させた。

「泣け、啼き、鳴かれよ。雷撃の鳥」

どちつと何かの泣き声がシグレの目の前を通り過ぎた。

瞬間的に発生した光が通り過ぎると、シグレは前へ倒れた。

左腕でその全体重を支えるには骨が折れたが、セイルは彼女をどこにもぶつけさせることなく、横たえさせることに成功した。

×××

痛覚遮断の言を習っていればよかった。そうすれば、自らに警告ばかりをしてくる痛みをどうにかできたものの。

私は、苦悶の表情を浮かべ眠るシグレの頬へと左手で触れた。

成人前の、若々しい肌だった。

自分が眠りにつくよりも遅く、彼女は、彼女たちは眠りに着いたのだろうか。

腕が痛い。痛覚が私の頭を支配していく。

目を閉じ、ゆらりと寄せる眠りの波に身を任せてしまいたい。

しかしそれは叶わない。せめて止血と、この体力を奪う雨から逃げなければ、いくら私が宗主並みの力を所有していても、さすがに無理がある。

他人の目はない。その事実こそが私を安心させた。

「ちり、塵、散り……道を……」

灰色に水が染み、黒くなった場所へと手をつける。

自分の手を中心に広がった波紋は、ある一定の距離まで伸びると反射し、大きく波打った。

人が通れるほどの大きさに広がった場所は、その囲い自体が揺れ動く波なので、長くはもたない。

フレイではなく、雀螢で名前を呼び、シグレを運ばせる。

「加害者すらも助ける貴様の優しさとやらは理解できぬ」

人らしき感情を持ち合わせているものの、そういった繊細な感情というものを察知するには雀螢はまだ幼い。とにかく、雀螢の助力を得ることは出来た。

意識はもう途切れ途切れで、雀螢に意識が途切れた後のことを頼み、私は眠りの波が寄せるに任せた。

×××××

豪雨を避けるために立ち入った森で、クーウェイは途方にくれていた。

双子の片割れを助けたはいいが、霧の立ち込める森で、下手に動くことが出来なくなっていた。

「シンスウ、大丈夫か！」

「お兄ちゃんは？」

「俺は大丈夫だ！！」

にかりと笑う笑顔に、シンスウは緊張していた体を、緩やかに休めていく。

スーシンはまだ見付かっていない。

探そうとした矢先の雨に、シンスウは落ち着きなく、雨を防ぐための場所を探しながらも、妹の姿を探した。しかし、人間らしい姿

を見ることも出来ずに、森の中へ入った。

「あの」

「ん？ どうかしたか?!」

「どうして……助けてくれたの?」

「何を言うか!」

突然の大声に、雨音が数秒ほど遠のいた。

「属区は別であれ、助けねばならん!! そうではないか? 風の
子供よ!!」

「はえつ、え、え?」

耳に響く声に、即座に対応できずに首をせわしなく動かすシンスウに、クーウェイは自分が大声を出しすぎたとは思わず、同じ音量で心配をした。

「で、でも、セイルお姉ちゃ……」

「あんな奴のことを気にかける必要はないっ!! 天の属区は悪し
きもの! 倒さねばいけないものだ!!」

興奮と、怒りで上気した顔を見たシンスウは、何故か哀しくなり、
何も言えなくなった。

「スーシン、大丈夫かな……泣いていないと……いいな……」

クーウェイから目をそらして、涙を堪えながら、妹の心配をすれば、
早くも冷静になったクーウェイが慰めた。

幼くても、属区に住まう人間なのだから、きつとどうにかなる

。 慰め方を知らないような言葉でも、今のシンスウにとっては嬉しかった。誰かが一緒にしてくれるだけでも、心に大きな余裕の差ができる。

「この霧が晴れたら探すぞ！ あの水属区の女、危険だ」

後に続いた言葉は、大声ではなく、普通の声として しかし恐ろしいほどに真剣に 発せられた。頷くシンスウも、実は同じ事を考えていた。

平然と死へと繋がる言葉を吐き出すのは異状。自分よりも幼い子供に、死への導き手にさせようとすることはさらに異常。キューノの、彼女の中で何かが崩壊している。

「スーシン……無事でいて！」

お願いだから、あの人に見付からないように 。
シンスウは風属区に加護の言を胸中で紡いだ。

変わり行くことは、時に駆け足に、時に鈍足に進む 。

第四期 赤き柱 始

目的持たぬ鳥など、彷徨い墮つるのみ

×××××

『目覚めたか』

雀螢が側にいた。目を開けたら、側に。

私の右手の、血で汚れた包帯と、新しいものを換えている。
何故か、頭が霞がかったようで、鮮明にならない。

『休んでいる。熱が出ている』

起き上がってみると、額から濡れた布が落ちた。布は、どこから調達したのだろうか。

布からは、微かに雨のにおいがした。

火の属性を持つ彼が、苦手な雨の中、懸命に布を濡らしている様子を想像して、少し笑った。

『何だ、その目は』

「くくっ……いや、何でも」

笑うだけで、傷に響いた。

雀螢の言うとおりに、私はもう少しだけ、と休むことにした。
彼女がいなくなっていることに気付かずに。

×××

少しと思ったつもりが、丸一日ほど眠り続けてしまったらしい。暑さで目が覚めた。

外へ出てみれば、炎属区の方に出現した柱が赤々と光り、その存在を主張していた。

「シグレは、どうした？」

『別の部屋だ』

「……昼日は？」

そういえば、気配が無い。あの、電気と、無機質さが入り混じったような気配は、機械特有のもの。分からないはずが無い。

『いない』

「う……ん？ 一寸待て。昼日がいなくなった際にお前はいたのか？」

『いた』

「ならば、外属区の男の気配はしなかったか？」

属性を纏わない外属区の気配くらい、判るだろう。

『した』

「迎えが、来たのか……フレイ……ありがとう」

普段ならば、その名前で呼ぶなどお怒りの言葉がくるのだが、こない。

数秒の静寂。藪をつついて蛇を出すのはやぶさかではないが、仕方がないことだと諦める。

「……もしや、とは思ったが、怒っているのか？」

それ以外の選択肢は無い。怒っているときほど雀螢は無口になる。

『別に』

ふいとそっぽを向く。ああ、怒っているのだなと実感した。

「そつか……いい、戻っている」

戻っている、とは姿を消しているという合図。

雀螢は何も言わずに姿を消した。私にも、見えないように。

これで確信した。当分の間雀螢は私の前に姿を現すことは無い。私の護衛がいなくなったというわけだ。

「真の名とは大切なものなのだから、納得してくれとしか……言いようがないのだ…雀螢」

そのものに宿る本当の名前は、知られば、そのものを好きに操ることの出来る、最大の凶器と成る。だからこそ、誰の前でも、言いたくは無い。使役する者として。彼の為に。

「太虎^{たいこ}。我が下にて、力を」

『御意。漸く吾れ^あを呼んでくれたか、遅いのう』

「すまない、フレイが嫌うのだ。お前を」

『……知っておる。だが、あれと長らく一緒にいる訳ではなからう？』

からからと笑いながら、分かりきった事を聞く太虎に、何も言い返すことは出来ない。言い返すこともできたが、また雀螢と同じように怒らせるわけにはいかない。

「そつ、だが……」

私が太虎を呼ぶことを嫌っている理由も、本人は知っているはずだ。聞いてくるのは、やはり自分が長い間呼ばなかったことに対して、少なからず怒っている証拠。

謝っても、きつと怒るだろうから、黙った。

『ふん、吾れに言い訳せぬか……いや、せぬのか？』

粘着質な声は、苛立つ。耳元でわざとらしく笑う太虎の態度は、最初は嫌いだったが、今では諦めと言う名の慣れがあるおかげで、私の口から怒声が飛ぶことは無い。

「したらしたでうるさい……だろう？」

『面白くないのう、吾れの性格を理解し始めおったか、生意気な』
口を歪めながら笑う太虎は、どうやら少しは機嫌がいいようだ。

「さて、シグレを回収するか、どうか……」

面倒だが、先のことを有耶無耶に 無かったことに すること
ができるが、一層のこと置いていってしまった方が気楽なように
も思える。

しかし期待とは、いとも簡単に裏切られるもので、遙か上の部屋
が、雷撃と共に破碎された。

硬い欠片が埃よりも速く落ちてくる。当たれば……無事では済ま
ないだろう。

「……ゆら、ゆら、ゆら。広き盾」

頭上で手を二回振る。別に手を振る必要は無かったが、出現させた

巨大な盾の下で、欠片が落ちきるまで待った。
しかし、予想外の衝撃が、盾を突き破った。

「うっ?!」

咄嗟についた右腕がじくりと痛む。

穴をあけられた盾の向こうから、飛び降りてくる女の姿が映った。
私の横を通り過ぎた太虎が、扇を取り出し、横へと振った。土の
傘が出来上がって、シグレが見えなくなる。

痛む腕に、これではまともな言葉など紡げないと舌打ちした。

『吾れに任せよ』

「任せた」

私を盾の下に置き去りにして、太虎が盾の外へと出た。

未だに暴走するシグレを、殺さぬ程度に止めてくれるだろう。勝
手は許されない、太虎が任せると言った限り、手出しは無用だ。

雀螢がいるときならば違っただろうが、太虎の機嫌を損ねれば後
は無い。他の3人は呼びたくない、出来る限り　　!!

『ほっほ、殺しはせぬわ』

爆音。続けざまに笑声と雷撃の音。

覗くことは出来ない。もどかしい程の時間。

背中を誰かが笑いながら押そうとしている、多分それは、自分の
本心だろう。

行きたいのだろうか？ 太虎を怒らせようとも、自分でどうにか
したいのだろうか……？

耳元で囁く声は、悪への囁き。

止まない電撃と何かが破碎される音のみが耳へ入ってくる。

「太虎!!」

体が飛び出そうになることは避けたが、やはり太虎の安否が気になった。

シグレはどうでもいいとして、太虎は手加減をしている。我を失っているシグレの方が危険だ。

『黙っておれ、吾れは無事じゃ!』

傘の一部が崩れた。

土埃が舞い上がり、咳き込みながら視界が開けるのを待った。もどかしい。

「いい加減……早う気絶させい!!」

焦りのあまりに大声は怒号になった。

『ふん、先に言えばいいものを』

分かっていたと言うように笑うと、その直後に聞き取りにくかったが、短いうめき声が聞こえ、同時に傘が役目を果たし、元の土塊へと戻り、地面へと落下した。

『随分と呆気のないものよ、のう』

乱雑に土に汚れた床の上にシグレをおろすと、扇を開き、口元に持つていく。

土を混ぜ合わせて固形化した扇が、いちいち太虎の声にあわせて模様を変える。

「まだ未熟者だ、これから化けるか、どうか……」
『それを見届けるのかえ？』

面倒な。

太虎の表面には現れなかった言葉が、扇の中で渦巻いて複雑な模様を作り出した。

「迷っている」

正直な気持ちを告げた。現実、そこが問題となって頭を痛ませている。

訳もなくあのようなことを言ったわけではなからう。ならば、自分が何をしたか、そこが気に掛かって私の足を止める。

『置いてゆけばよい』

ああ、その通りだ。そうすれば、私の迷いなど晴れるだろう。ただし、約束が破られる。

「シグレに決めさせる」

『なにゆえ
何故？』

「約束事だ。強き糸だ」

『あの若造かえ、面白くないのう……そうじゃ、舞え』

土で出来た扇が抛られる。

受け取ったそれは、持った先から崩壊をはじめ、土色の粉末へと変じた。

太虎を見やれば、偉そうに顎をしゃくる。

「私は由武でも、炎楽でもない」

『知っておる。それがなんぞ問題でもあるのかえ?』

唯我独尊。まさにこの事だ。

私は炎属区の心の宗主候補であつて、楽士の炎楽でも、戦舞せんぶを踊る由武でもない。見たことはあつても、踊ることなど、到底無理だと分かりきっている。

笑うつもりなのか。舞いも踊れぬ自分を見て。

『なに、笑うつもりなどない。ただ、お主の舞が見たいだけじゃ』

「……突然、何を言い出すのかと思えば……」

『舞えぬはずは無い、ここに貴様がいる限りな……この意味が……理解できているであろう?』

そういうことか。

シグレは目を覚まさないだろう。おそらく、太虎が満足するまで。そういう“術”を使つたらしき痕跡が見える。

面倒だ、だが、先へと進めないと困るのは太虎ではなく、私であり、シグレである。

属素ぞくそを集める。場所が場所なだけに、属素がつかめない。

炎、水、風、土、金、雷、氷 属区の“場”であつたら、属素は目に見えて大量に存在している……属区に存在する属素を太い糸だとしよう。ここは、太い糸を作れるほどに属素は充滿しているが、それぞれが別の要素であるために、細い糸としか認識されない。

「扇を」

『どれがいい』

手を横に一振り。

太虎の持っていたものに、属区の印象図を彫り込んだもの、どれも土で構成されているものだったが、彫りは深く、美しい細工だった。

「これを」

夜空に浮かぶ星々の扇。天候の急激な変化に隠される夜空。見えるはずもない星に、どうやら私は遙か遠い距離ではあるが、逢瀬を望んでいるようだ。

舞に音は必要ない。楽士がいるのならば、いたほうがいいが、音楽は自分の体が識っている。

「流るる様を」

しゃん。

耳の奥で鳴子が音を奏で始める。

さあ、舞を。

×××

「満足かつ……!?!」

自棄になった声を出せば、太虎は嘲るとも見て取れる笑いを浮かべてほ、ほ、と短く笑った。

『踊れるではないか、嘘つきめ』

「自分でも……驚いては……いる」

気力を使い切り、両手を地面へと置いた。

私の周りには点々と赤黒い跡が。傷口が遅い痛みを訴えた。

「目覚めさせてくれ」

『心は』

「決まった」

一度も目を覚まさないシグレに、雷の属素を三連成で繋ぎ、腕に纏わせる。その時点で私の手はシグレの頭部を通り抜けた。そして、その手を抜いた。抜き取った雷の属素は、すぐに空気中に霧散した。一連の動作を見ていた太虎は、私の顔を見ると、軽く頷いた。

『承知した』

太虎は右手を横に振り、左手を、右手を振った軌跡の中心当たりで縦に振った。十字だ。

薄く目を開けたシグレは、ぼんやりと周囲を見回し、私を見つめた。

「なんか、あつたん……か……？」

「何も、なかったが。調子はどうだ？ あの柱を見てから、急に倒れたのだ、お前は」

「……そう、やった……悪かったなあ」

起き上がり、私と視線を合わせて頭を下げる。

すぐに面おもてを上げるように言った。

「あの柱はおそらく、よくないものだ」

そう、よくないもの。

人の命の代わりにこの異常天候を起こしている。

「そやねえ……よくない、嫌な予感がするわ」

忘れている。見たものを。

「だから、壊す」

覚えていたら、おそらく反対するはずだ。

「賛成や！ あんなもん、必要ない！！」

「よし、何処から行く？」

一応は聞いたが、行く場所はすでに決めている。
納得させる材料もある。自分勝手ではあるが。

「雷属区を先に……して欲しいんやけど……お願いや」

力なく頼む。頼まれなくても、行く気だった。

「気にするな、私も同じ意見だ。今は、あそこの柱が光っている。
行くなら……今だ」

言葉を添えて後押しする。

今度は力強く頷いて、私よりも先に塔から出て行って数秒。

「あつついわーっ！！」

そう叫んで、駆け足で戻ってきた。

「ところで……」

ほんの数秒ほど外にいただけだったが、その額には汗が玉となっていた。

何だ、と返せば、私の右腕を指した。

「その怪我、どうしたん？」

赤き柱は動かず、ただ静かに人の命を燃やしながら其処へ存在する

第四期 赤き柱 中

上がる煙。

それは何なのか、そう、燃やしている。

×××××

結局、私とシグレは出発を遅らせることにした。

外の天候の、予想以上の悪さに、進む足を戻さざるを得なくなつた。

何より、私の腕の傷が悪化し、熱を出して私が倒れたこともあつた。

「う……」

頬を撫で上げる風が冷たく、吐き出す吐息が白い。

寒い。寒い、寒い。

気付けば右腕はなかなか良い具合に冷えて、熱も収まったようだった。それが嫌だ。寒さが更に主張されている。気持ち悪い。

天井は、見知らぬものではなく、私一人のために宛がわれた部屋のものだった。劣化した壁は、所々が崩れかけているが、元の状態が判るほどには状態維持が出来ていた。

寝台の隣には、明らかに朽ち果て、壊れる寸前の椅子に座つたシグレがいた。声をかける前に三連成みつなりで寒さを遮断した。

「シグレ」

「んん？ あ……起きたんや、熱は、どう？」

「大分よくなつたみたいだ。心配をかけたか？」

シグレの目の下に住み着いた隈が見えたので、気遣って聞けば、寝ていたのか、少ししゃがれた声で返してきた。

「ええんよ、何かうちも大分心配させたみたいやし……」

「どのくらい寝ていた？」

「丸一日くらい。今は青い柱が光つとるよ」

そうだろう。命を削る柱たちは、不規則に中にある命を削りながら入れ替わり入れ替わりそこにあるのだから。

冷気が部屋を無駄なほどに冷やしている。

シグレは、何度も体をさすりながら立っていた。

「だん、暖、だん……暖める」

「ありがと。うちが水属区やったらよかつたんやけどね」

「外が暑いときの、為か？」

「そりゃ……そうや、偏ってたらどうにもならんからな」

だが、もし属区が違っていれば、今の状況は作り出せずに、むしろ悪化させるくらいしかできないだろう。シグレも、そのことに気が付いているはずだ。曖昧に、誤魔化すかのように苦い顔をしている。

「もし、なんて今さら、だな……」

シグレの返事は「うん」との一言だけだった。どこか上の空だ。

「行くぞ」

「体は？」

「もう大分良い」

歩き出す。するとふと目に留まったのは、音の出る小箱。

螺子を巻けばまた動くのだろうか。私はそれを手に持った。懐に入れようとして、そこで急に思い出した。

「確か、服があったな」

×××

体力を奪う霧雨は止まず、視界ばかりを悪化させていた。

始めは雨避けにと蒸発させていたが、今度は霧雨と霧に襲われた。そうなるとう水を蒸発させることは得策ではない。今は、シグレ共々着替えたはずの服を、その重さに引きずりながら時折光る柱の位置を確認しながら進む。

自分たちと向かう位置から正反対の、塔の向こう側を映し出すために水鏡を作った。光の柱の中が見えないように鮮明さはわざと欠いた。

日の存在は確認されていない。厚い雲のさらに上だ。

「ちよお、休憩」

シグレが水を吸って焦茶色をさらに深くしている大木の上に腰をかけた。

自身に疲れはあったが、座る気は起きなかった。座ったら、おそらく次に歩くときが辛くなる。

「座ったらどう?」

こう座り込んでしまっただけでは、待っているほども苦痛だろうとシグレが言ってきた。

「いい。少し、見てくる」

何を、とは言わず、シグレは気になったようだが、少し浮かせた腰を倒れた大木に戻すと、足の疲れが解れていくようで、顔が緩んだ。霧が濃密な水の属素を循環させている。水鏡を作るとしたら、今が絶好の機会だろう。

シグレから離れていき、幻のように影でしか確認できなくなるまで歩いた。

「映、結、像、風」

漢字で属素を形として成す漢成は、一文字余計な字を混ぜなければいけない。それも、これから作るものと関係の無いものでなければそれは成立しない。これは体ではなく精神に負担を掛ける。そのため属区の者に使用は推奨されていないし、許されてもいない。

形を成すためには、まずそのものの構造を詳細に想わなければならない。

想像した鏡は手鏡で、昔戦利品として所持していたもの。だが同じく昔に壊してしまったので現存していない。

作り出した鏡は、記憶のものとはしかし異なっていて、その物自体の経てきた時間というものが感じられなかった。

「時間はつくれない……か……」

触れることも見ることも出来ない“時”という大きな存在。言葉の枠に当てはめられてはいるが、それはそんな枠に収まるほど小さくは無い。いや、それはどんな物でもそうだろう。枠は、勝手に作られている。

鏡を凝視して、映したい場所にあるであろう属素で“目”をつくる。

属区の民は“目”をつくる事などしない。宗主、以下その血を真

に受け継ぐ者のみの苦勞。思わず溜息が出た。

徐々に明瞭になる鏡の中に集中はせず、シグレの影が動きを見せないか見張る。動いてはいないようだが、足踏みをしているように見えた。

目を離していた内に、鏡の中は乾きかけの血液のような色を映し出していた。

安らか、とは言い難い表情ではあるが、苦痛と言う表情でもない顔がたくさん浮いている。傷つきも病みもしない彼らは、ただ目覚めない。

「これが全て炎属区の者だとは、な……」

赤い柱の中で、果たして目覚めない眠りにつき死ぬことが無いか、苦痛はあるが意識ある中死ぬのがいいか、聞こうにも相手がいない右腕が熱を持ち始めた。遮断していた痛みが蘇る。言霊の力が薄れたのか。

再び言葉を紡いだ時、鏡が消えた。効力を失ったそれは、緩やかに属素となり空気中へと漂い始めた。属区の間には見えない光景に、薄く息を吐いた。

「……何か、あったか」

シグレの影が動く、頭が霞む。首を振ったのだろうか。

「私はここだぞ、シグレ」

レ。と伝えようとした口は急いで自分の手が覆った。

新しく影が増えた。小柄で、その影の長さで推測するところ12、3歳くらいだろう。

他の属区か？ 敵か？ 攻撃の意思は？ 途端に回りだす頭が、

ともかく音を出さずに動こうとそろそろ動きだす。

現れた影は足取りおぼつかなく、今にも倒れそうであり、属素が急激に減少しているのだろうと思わせた。

近づくごとに、シグレの声が大きく聞こえてくる。

「どうしたん？ その液体は……セーちゃんと同じっ!？」

「シン姉ちゃ……は……？」

この、声は。。

聞き覚えがある。液体？ 同じ、だと……？

「スーシンか！」

離れたところから聞こえた声に、スーシンは慌てて左右を見る。何かに怯えている。しかし、何に……。

「ご、ごめっ……なさっ……ごめんなさいっ！ ノズミお姉ちゃん、お願い！ シン姉を助けてっ!!！」

姿の覚えてきた私に向かって叫んだ。傷を負っている。鮮血が見えた。

彼女もそうなのか。

「何があつたか教えてくれない？ 話はそれから」

目覚めたばかりのときのよ様な言葉遣いに戻せば、シグレは一瞬奇妙な表情をして、何かを読み取ったのかあえて私に何か言ってくることはなかった。

頷いたスーシンは怯えを隠せずに、震えた声で自分の見たものを、たどたどしく私とシグレに説明した。

×××

「なるほど、で、シンスウを探してるわけか」

「うん……あの……ごめんなさい」

「さつきも聞いたよ?」

「うん。でもね、何回言っても足りないよ……」

自分がどれだけのことを言ったか理解しているスーシンは、子供にしては賢いほうなのだろう。そういった子供のほうが思考がおかしな方向へ曲がってしまう。

「気にしないからいいよ。それに、今は、どうなのさ?」

「今は……ノズミお姉ちゃんなら……大丈夫」

「あたしはどうなの?」

「え」

あなたもなの、と言いたがっている。表情が正直に語っていた。

「元は雷属区なんよ、あたし。あんたは?」

「わ、私は風属区です」

「ふうん……そう」

会話を続けることの困難な言葉を返す。

シグレから見たスーシンの第一印象は少々悪いようだ。

「あんた、名前は? 名乗りいよ」

「名乗り……いよ?」

シグレの独特な言葉遣いに困惑しているようで、私はスーシンに「

名乗るんだよ」と助言した。

「私はスーシン・ユウメイ……です」

「あたしはマクモ・シグレって言うんや、よろしゅう」

「え、あ、はい。よろしくお願いします」

頭を下げると髪を濡らした雫が重力に従い落ちていく。

顔を上げたスーシンに、シグレはようやく気になっていたらしい疑問を口にした。

「その液体って何？」

×××××

血液についてどう説明したらいいのか知らないスーシンと、知っているが説明することのできないセイルを質問攻めにしたシグレだったが、雨が強くなると気力も減り、炎属区の人々のすむ村へと早く向かいたいと言い出し、歩き出した。

元より休む気は無かったセイルと、彼女に手当てされたスーシンはもっと早くに移動したかったのだが、本音はあえて言うことはせず、最終的にはセイルが先頭になり先を急いだ。

スーシンの提案で、周囲に風を発生させて人工的に追い風を作り出してくれた。せつつかれるように先を進むと、何十年も経ったように思わせる朽ち果てた建物たちが群れを成していた。

「誰もいない。いるはずもなかなあ……」

分かっていたはずでも、やはり衝撃を受けている。セイルは、おぼつかない足取りで、そこで一番大きな建物へと入っていった。その後ろを、スーシンとシグレが追い駆けたが、建物の前でシグレは立

ち止まり、スーシンは建物に入ること戸惑ったが、セイルの尋常ではない様子を心配し、ついていった。

「お姉ちゃん、ここ……は？」

「知っているはずだろう？」

スーシンに背を向けたまま、セイルの冷めた声が返し、知らぬ間にスーシンは震えていた。

「ここが、どういった場所か……」

「知らないよ、わ、私風属区の外に出たこと……ない……から」

「嘘だな」

属素を集めて周囲に灯かりを散らしたセイルが振り向く。灯りに照らされた瞳は、属区にいる人間なら有り得る筈の無い黒。

小女は、驚愕のまま、引き寄せられるようにその瞳へと手を伸ばしていた。スーシンの瞳は風属区の緑。セイルの瞳の色は、炎属区の赤。しかし、今双方の瞳は属区に当てはまることの無い黒が主張されていた。

「お姉ちゃん、も……なの？」

「ああ」

「私とシン姉だけじゃなかったんだ」

安心したのか、微笑んだ小女の手に触れた。セイルは一つの確信を持って聞いた。

「宗主の血筋か」

「うん。シン姉ちゃんと同じ、宗主候補だよ」

「属区へ出たことが無いと言うのも、嘘だな」

小女のついた嘘は、小女の口により話された。

「そう、だよ。でもね、お姉ちゃんがそうだって言ってくれなかったら、目覚めた時にもう別の属区にいたよ、て言っつもりだったの」とんだ策士だ。セイルは小さく笑う。

「互いのためにも宗主候補であることは秘密にしておこう。いいか？」

「いいよ」

「あと、私のことをいちいちお姉ちゃんなんて呼ぶな、気恥ずかしい」

少しの照れをもって言ったセイルに、スーシンは次からどう呼べばいいのか尋ねた。

「そう言われると……そうだな、せめてさん付けでいいから呼んでもらえればいい」

うん、と頷くと、スーシンは人差し指を口の前に立てて、シグレと待っていると告げて引き返していった。

時を見計らったかのように雨が屋根を叩く音が強くなった。スーシンの背中にどこかの建物で雨宿りをするように言ってから、セイルは建物の中を歩き始めた。

雨に遮られた声は届いたのか、届かなかったのだろうか、考えもしないのだろう。

第四期 赤き柱 終

様は無い。お前たちにかける言葉なんて、今更あるはずが無い。

×××××

「灯・灯・灯……灯せ」

灯かりが纏わりつく。雨で明瞭としない景色が鮮明とは言い難いが、はつきりとする。

セイルは屋敷の入り口となる場所から右へと曲がり、奥へと進んだ。

渡り廊下と部屋を繋ぐと正四角となる。四隅に一つずつ、互いを結ぶ廊下の中に一つずつ。計八つの部屋で構成される其処は、宗主の候補が住まうための場所。

その奥へは、結界が張られているため、限られた者しか進むことは出来ない。

「まだ、行くべきでないな」

宗主の住まいへと。セイルは正面に結界の真中を見ることが出来る部屋にいた。

触れれば崩れる簾をどけて、窓から顔を出してみると、セイルの顔に細かい雨があたった。雨は、勢いはなくなつたが霧のような小雨となり降り注いでいた。

「火蜥蜴、いるのだろうか？」

半ば崩れた簾を再び戻し、乾いた素材が重なり合う音を背景に、セイルは天井に向けて声を放つ。

『へっ、今更なんだってんだい、俺っちを呼んじゃってくれんの…
…はあああつ!?!』

身の丈3尺もあるであろう蜥蜴のような生き物が、天井から落ちてきた。

悪態をつく火蜥蜴は、セイルに気付くと絶叫した。騒がしい、とセイルが低い声で言えば、敬礼をする勢いで口を閉ざす。

「なんだ、貴様まだここへ居着いていたのか」

『行く場所ねえもんよ、で、何だっであんたはまだ生きてんだい？
思念体なんざじゃねえだろ?』

上から下へと観察していく火蜥蜴は赤く、煌々としていた。

「時は、どれほど流れたのだ?」

『んー困ったなあ、俺っちは時間とかあんま気にしねえもんよ、でも……そうだなあ』

時を感じることに無い身では、通り過ぎた時間を思い出すことすら困難なのだろう。火蜥蜴は懸命に記憶を辿り、そこで何やら良い事でも思いついたようで、つり上がり気味の目をぎよるぎよると動かした。

『俺っちの額にある、“燃える鱗”はいくつある?』

燃える鱗。これだろうか。セイルは赤々と燃える鱗を数える。

一つ、二つ、十、百と数えていると、火蜥蜴が大きく震えた。そ

して、火蜥蜴の体を覆う鱗がざらりと裏返った。

「貴様……」

『わ、わわっ！！』

急いで飛び退る辺り利口なのだろう。すぐさま人の形を取ると土下座して謝罪した。

「蜥蜴^{ヒキエキ}。私に余計な手間を取らせた理由は何だ。言え」

『お、俺っち火蜥蜴の燃える鱗は1年から5年で増えていくんだ。細くなればなるほどそいつは年齢を重ねてる証拠。時が経ったのならそこを見ればいいと、そう思ったんだ！』

「ほう……では、何故それほどに不定期に増える鱗を数えさせた」
『鱗の増える速度つてのは、俺っち火蜥蜴なら火の要素の多いところなら、1年くらいで1枚増える。だからさ』

若干震えている褐色の指を見て、セイルは手入れのされていない、腰ほどまでに伸びる赤い髪に隠れた顔を見たいと思ひ、面^{おもて}を上げると命じた。

痩せこけた、しかし薄っすらと浮かべる笑みに狡猾さを感じさせる男は、セイルの言葉を待ち、許しを得て立ち上がった。

ひよろりと伸びる体は、セイルの頭一つ分ほど高く、見下ろす形となっている。

「伸びたな」

『まあね、俺っちは年を重ねればある程度は育つさ、ただ、その先は無いけどな』

「そうか。貴様は……」

『うん？』

何か言いかけたセイルは、しかし一度だけ軽く頭を振ると何も無いとだけ告げると、結界と部屋の挟間とされる庭へと降りた。

炎属区の属石の欠片が、所々に埋もれている。結界を維持するために使用された属石の残骸だった。

ふと気配を感じたセイルは、空へと顔を向け、そして自らの立つ地面が揺れていると判断すると、同じく降りてこようとしているセキエキを、こちらへ来るなど手で制した。

「柱の光が、変わる」

雷鳴と地鳴りが同時に襲ってきたかのような轟音に、セキエキは慌ててセイルの元へ身を寄せようとしたが、地割れが起こり、深く亀裂の入った場を飛ぶ勇氣は出ずに、ただ彼女の名前を呼んだ。

セイルは何事も無いかのように、ゆらりと顔を下へと向けて、口を歪ませた。

「想術を使う。下がっている」

『待て、集中力が必要だろ！？ なに考えて……！！』

セキエキの姿が消えた。

建物の一部が地の底へと消え、セキエキも今、そうなるうとしていた。

人の姿であったセキエキは慌てて火蜥蜴の姿へと戻り、離れ行く地面の片側へとへばりついて堪える。

セイルは自分の立つ側へと渡ったセキエキへ手を差し伸べた。

「掴まれ」

『助かる』

即座に人型へと戻り、セイルの差し出した左手に掴まる。

「張れるか」

「何？」

「結界だ。やはりこの状態では想術は使えぬ」

「……ところでよ、何をつくるんだ？ この地割れを戻すのか？」

言葉を発しながらも、セキエキは人型のままで燃える鱗を額に出し、薔薇の蕾のような形に集めると、それをゆっくりと花開かせ、結界を形成した。

結界が張られるとセイルは目を閉じ、セキエキに返事せぬままに集中状態に入った。未だ地面は揺れ続けている。

セキエキはセイルに目を向けはしたが、何も言わずに結界を張ったその場と、地面を崩さぬように集中した。

「心臓」

脈打つそれは血液を循環させる器官。赤の光が現れる。

「目」

見回すそれは闇さえ見る。青の光が赤の光よりも上の位置へと現れる。

「嘴」

獲物を捕らえる鋭きもの。白い光が青の光より少し下の位置へ。

「翼」

空へと手を伸ばすことの出来る力。黒い光が赤の光の真上へ。

「出でよ」

セイルの一言でそれらは明確なる形を与えられ、その姿を現した。

「飛べ」

セイルの体をさらった“それ”は、巨大な鳥だった。

「貴様も来るか、来ないか、好きなようにしろ」

鳥の背で立ち上がるセイルに、寒気にも似た感覚が駆け上った。セキエキは震える体を動かして、セイルの隣へと跳んだ。

「さあ、往くぞ」

それほど長くない時を経て、揺れは治まったが、シグレとスーシンの姿が見えず、再び揺れるやもしれぬということで、上空より探し回っていた。

『いい加減下りた方がいいんじゃないかねえか？ これじゃ探しきれねえよ！』

「……いや、雷属区へ向かう」

『何でよ？ 奥地にいる確信でもあんのかよ』

「ある。理由は簡単だ、シグレと雷属区を目指していたからな」

炎属区の領域を、海へ向かってさらに奥へと進むと、雷属区の領域になる。炎属区から派生した雷属区は、ほぼ隔絶された土地とも言える。もちろん、それは水属区から派生した氷属区にも同じことが言える。

しかし炎属区を思わせる赤の柱は、何故雷属区の属区内にあるのか、セイルはそれが気に掛かっていた。

「それも、確認せねばな」

『何が？』

セキエキの問いには答えずに、セイルは下方を眺め続け、雷属区へと向かった。

×××

「セーちゃん！ 無事やったんね」

「ああ、二人とも、怪我は無いか？」

雷属区の領域へ入ってすぐ、民家の中へ入ろうとしているシグレとスーシンが見付かった。

鳥の羽ばたきを聞き、上を見上げたシグレが大きく手を振り、スーシンは好奇心に目を輝かせ、セイルたちが降り立つのを待った。

「大きな鳥……すごおい！」

「とんでもない奴やね」

「……褒め言葉として受け取っておこうか。柱の方へは？」

「行つとらんよ、今さっきの話やしね。ここへ来るので精一杯や」

まず、何故危険な状態で移動しようと思ったのかが疑問に思われたが、セイルは何も聞かなかつた。

『で、こいつら捜してたわけ？』

「ああ」

「ん？ 何やそいつ」

『ああん？ そいつたあ失礼だな、俺っちは火……』

セイルの鋭利な視線が貫く。

『セキエキつつうんだよ！』

「ふうん、セキエキ言っつんやね、あんた。セイルの知り合い？」

一応な。セキエキが肯定を示し、シグレが興味をセイルへと移した。

「で、これからどうするん？ 柱の方の道は地割れのせいで通れん

よ？ あ、そのための鳥なん？」

「いや……これは二人までしか乗せることが出来ない」

「じゃあ、どうするの？ お姉……セイル……さん」

言いにくいのか、少し噛んだスーシンは、困り顔でセイルを見上げた。

「これは一体だけでも力を削られる。二人だけだ。私と、もう一人」

「うちでも召喚よべる？」

「想術が使えるのならな」

興味無しといった様子で彼方を見つめれば、シグレは溜息を一つつくと、スーシンの目線にあわせるために膝を折った。

「どっちが行く？」

セキエキは候補から完全に外されているらしい。スーシンは視線を漂わせ、眉を八の字にしてはいるが、セイルとの同行権を手にすることを考えていた。

無言の戦いはほんの数秒で決着がついた。

スーシンが眠りの風を作り出した。

甘く、優しく、そして癒されたように錯覚させられる風が、シグレを包み込んだ。

短い悪態もすぐに寢息へと変わり、安らかな眠りについたシグレをセイルが支えた。

「意外にやるな」

皮肉ではなかったが、スーシンはさらに困り顔を深くして、「ごめんなさいと言った。

「なに、これで行くものは決まった。シグレは……そうだな、セキエキ、貴様に頼んだ」

『俺っちがあ?!』

「嫌か」

『嫌じゃ、ねえけどよ……仕える者がいなけりゃ俺っち暇になるからよ』

つまり、セキエキはセイルの身を心配しているのだ。

「私はそこまで弱くはない、いいか。頼んだぞ」

『承知。気を付けるよ、俺っちだって分かる。あれは良く無いものだ』

シグレを担いだセキエキは、飛び立っていくセイルとスーシンの姿が消えるまでその場から動かなかった。

再び地面が揺れ始め、不安定な地を危なげなく進んでいくセキエキは、炎属区では強く感じるこの出来ない土の属素が満ち始めたことを敏感に感じ取った。

『んったくよお、これで一体何回目だ？』
『もう、数え切れねえか』

片手で数え始めてみたが、元より真剣に考える気もなく、セキエキは左肩の重みを感じ、再び空を見上げ、苛立ちを覚える重苦しい空を見、憂鬱な気分になり正面を向いた。

目に見えたものが真実などと、誰が認めたのか……？

赤硝子 始

厚き壁、壁とはただ何も無い場所には立たず、つまるところ壁は何を隔てているのかという話だ。

×××××

熱風が地上遠くにいるセイルたちのもとまで届く。

汗は止まることを知らぬかのように流れ、纏う衣服を錘に変える。酷く痛めつけられた傷がそう簡単に癒えるはずもなく、セイルの内心では痛みと消えそうになる想術を繋ぎ止めようと必死だった。

セイルが先程まで何事もないように出来たのは、傷付いた腕を他人の、健全な腕を持つ人間の感覚に摩り替えることに集中したからであり、想術を使う方へと集中しなければならぬ今、それに集中するわけにはいかなかった。

「このままでは近づけんな」

誰に言うでもなく、セイルは立ったまま間近に迫った赤い柱を睨みつけた。

暑さのあまりに歪むその柱は、依然沈黙したままではあるが、いつその光を灯すか分からない。

想術を使い続けるには、その姿を想い描き続けなければならない、セイルの集中力も限界に近かった。そもそも想術は、並々ならぬ集中力と、それを保ち続ける体力が必要だというのに、術を使用する条件としては、この場は最悪であった。

その様子を横で座り込んで見ていたスーシンは、何か出来ないかと考えを巡らした。しかし結局はこの暑さが問題なのであって、ああでもないこうでもないで自分で自分を混乱させた。

「どっしょよう……道が、あそこに近づく最短の道があればいいのに……」
「空、だからな」

空に道など無いことは分かっているながらも、最短の、という言葉には惹かれてしまう。

スーシンが本気で最短の道を考えようとした時、セイルは柱の方から一直線に伸びてくる赤い光を見た。

真っ直ぐに向かってくる。その光は間違いなくセイルを指していた。

「まさか本当に迎えがあるとはな……」

セイルの呟きを拾ったスーシンが、遅れながらも赤い光を見付けた。伸びてきた光に触れようか逡巡し、セイルはとりあえず左手を緩く上げ、指先だけで触れてみることにした。

熱くはない。寒いときならば重宝する温い暖かさを持っていた。

「早く来いと急かしている……なんて、まさか……な」

乾いた笑いが漏れる。赤い光はセイルの左胸で止まっていた。

「これが一番短い距離で行けるって教えてくれているのかな？」

赤い光を見ていたセイルは、眩暈を起こしたが、踏みとどまり、スーシンの言葉にどう返そうかと考えようとして、思考を遮る痛みに小さく舌打ちした。

「あつ、さを……この暑さをどうにかしなければ、辿り着く、前に

…」

意識が急降下するような、足元が崩れるような感覚に襲われて、不調を悟られないように、体をゆっくりと鳥の背へと落とした。

互いに汗だくで、スーシンは無意識の内に体をくつつけることのないように、広い鳥の背を落ちないように動いた。

気を遣われたセイルは、スーシンが一人集中して何事かを考えているので、こちらも気を遣って声をかけないようにしようと思ったが、その瞬間に気になる眩きを拾ってしまった。

「ああ、駄目。“声”が聞こえない……」

「声？」

やはり集中していたのだろう。スーシンは驚いて飛び上がりそうになったが、今居る場所を瞬時に思い出し、大人しくなった。

「シン姉がいないと、皆の声が聞こえてこないの」

「何だ、それ？」

何かの問い掛けだろうかとセイルが首を傾げると、スーシンは否定するように首を振った。

「属区を司る皆の声……シン姉と一緒にじゃないと…聞こえないの」

「そうか。お前たちは2人で1人なんだな」

「うん。セイルさ……ん、は聞こ、え……」

同士だということに気持ちが緩んだのだろう、嬉しそうにセイルの顔を見上げようとしたが、その顔は焦りに塗り替えられた。スーシンは目の前で玉の汗を流し、目の焦点が定まらないセイルの腕を強く掴んで休もうと強く言った。

「……いい」

荒く息を吐き、言葉を発する気力すら失せ始めているというのに、雷属区に現れた柱をセイルは睨んだ。いや、よく見ると違う。彼女の目は柱との中間地点の辺りを凝視しようとしていた。

「そこに、いるのか……？」

声を向けた先からの返答。しかしスーシンには言葉だと認識の出来ない囁きでしかなかった。

『我の声を聞くか、属せぬ子らよ』

声には圧力と、完全なる拒絶が含まれていた。

しかしセイルは突然として理解した。この存在は、もうすぐ消滅してしまいそうなほどに弱っている。

セイルとスーシンの前に現れた姿は、輪郭があやふやで、途切れがちになる形を無理に保とうとしているように見えた。

「水の属素を司るものよ、力を貸せ」

『巫山戯るなっ！！』

尊大な態度に苛立ちを表したそれは、細かに散りばめた水を高速発射した。

しかし水の属霊は自らの攻撃が同じ属素により構成された何かに妨害されたことに目を見開いた。

「……海風か、私を殺しにきたか？」

熱風の中、涼しげにセイルの口から出たからかうような言葉。それに反応して、刺々しい言葉が投げ返された。

『同属が穢れた貴様を殺すことが許せないだけだ』

ほんの一瞬。セイルの目の前に現れた青年の姿はすぐに消え、気配もなくなり、完全に姿を隠してしまった。

消える寸前に青年の発した言葉は侮辱であることは明らかで、スーシンが言い返そうとしたところをセイルが止めた。

どうして、と問い掛けようとしたスーシンだったが、セイルが視線を合わせ、小さく肩を竦めたので、いつもそうなのだと、慣れているのだと理解し、俯いた。

「いらぬ邪魔が入った」

邪魔の一言で済まされた今の事態に、属霊は啞然とした顔を引き締めた。

話に口を挟めないだろうと思い大人しくしていようと口を噤んだスーシンは、セイルの言葉に反応するかのように、風に僅かな苛立ちが乗って届いたことに小さく笑い声を漏らした。

「すまぬが今一度問わせていただこう。」

「私に、力を貸せ」

へりくだった言い方をしないセイルと、真正面から見合っただ数秒。視線は外さぬままに、存在の危うい水の塊がセイルの前に立った。

何も言わずに地中より大量の水を引きずり出し、無理やりに地上の熱を押さえ込んだ。

長くは続かないだろう。感謝をする言葉を発する時間すら惜しみ、巨大な鳥を先へと進めた。

×××

「助かった。礼を言う」

赤い柱に辿り着くと、自然と暑さが引いていった。

何かしらの力が働いた結界だとセイルは推測した。ここへ来るまでに倒れればその結果は存在し続けるだろうが、辿り着いてしまえば到達者を迎える。修練場などでもある、ある程度の実力をつけたものならば誰であれ使えるようになる術だ。

想術をとき、痛覚を出来るだけ遠ざけるよう集中しながら、セイルは再び現れた属霊と向かい合った。

『いずれ消えようこの存在に目をかけてくれただけでいい。忘れるな』

「何故だ？」

忘れるな、とはもうすぐ消えそうな属霊としては、切実な思いだというのに、セイルは問いかけた。

「水を消耗していく火は消えた。だというのに、何故」

水を蒸発させる暑さも、炎も消えた。ならばどうしてと疑問に思っているのは当然とも言えることだった。

『結界が消えたままだと、無用心だとは思わないか？』
「だがっ！！」

納得したスーシンの隣で、言い返そうと属霊に向かって一歩踏み出したセイルの頭上に、大量の水が現れ、重力に従いセイルの全身へ

と降りかかった。

水でなくされた視界が戻ると、そこに属霊の姿はなく、声のみが残された。

『無茶をするくらいなら休むがいい、軟弱な人間よ』

その言葉を境に消え去った属霊に軽く苦笑し、セイルは柱へと向いた。

「痛いのか？」

スーシンが唐突に聞いた。

疲れたのか、ではなく痛いのかという質問。気付かれていないと確信していたセイルは驚き、咄嗟に振り向いた。

やはりと確証を得たスーシンは、気付いてないとも思ったのかとセイルの右腕の袖をまくった。

「痛っ……!!」

「血の、臭い。気付かないとでも、思ったのか？」

自分たちに有利になるように吹かせた風。風を操る際に時折混ざる嫌な臭い。気付いていても、集中を崩すようなことをしたくなかったスーシンはあえて黙っていた。

「言うてよ、私だって……少しくらい……」

まくった袖を掴んでいた腕が離れて、俯いたスーシンから鼻をすする音がした。

下手に心配させまいと、大丈夫だと思いついて黙っていたセイルは、途端に自分がその選択を誤ったと理解させられ、ぼつりと謝罪を口に

した。

「すまない。いつもそうなんだ、私は」

大丈夫だと自らを過信し、限界まで引きずる。セイルの不器用な性格に、スーシンはぐずぐずと親を困らせる子供のように我侷を言った。

「言つてよ、私にだけ。私にだけでも……お願い」

「……言つ……よりも」

セイルは気まずげに視線をそらした。

「気付いてくれ。悪いが、おそらく私は言わないだろうから、言つてくれ」

「言えば、頼つて……くれる？」

相変わらず俯いたままスーシンが声に僅かな期待を含ませる。

「言えば、な、気付かれている事柄に白を切り通すのは正直な話面倒だからな」

セイルは柱を見上げた。黒ずんだ柱の中では、人々は息をしているのかと疑問に思つくらい、身動きをしなかった。

「気付くよ！ 私頑張つて気付くから！！」

必死に言うスーシンに、振り向いて軽く笑ったセイルは、これからどうするべきかに頭を悩ませた。

柱は力を抜いて拳で殴つてみたところ、かなりの厚さがあること

が分かり、材質は、木や石などとは違う、硝子であることが発覚した。

硝子自体が本来珍しいものであり、見かけることなど無きに等しい物だが、それを知るセイルでも、記憶しているのは落としてしまっただけで簡単に壊れてしまうような脆い物体だった。

「壊すに……手間がかかりそうだな」

「これを、壊すの？」

スーシンは疑問符を浮かべ、珍しい材質でできたそれを触った。好奇心からだろう。

その時、拒絶するかのように突然赤く強い光を柱が発した。

「きゃああっ?!」

セイルが事態を理解したのは、スーシンの叫び声が柱から少し離れた場所から聞こえてきた時だった。

先程セイルが触った際には何事も無かったというのに、スーシンは拒絶され、吹き飛ばされた。

何故だろうかと疑問に思い、しかしすぐに結論は出た。セイルは炎属区であり、スーシンは風属区に属する人間。セイルは受け入れられたとしても、属区同士の排他的風習により、スーシンは弾かれてしまったのだ。

そうとしか考えられず、セイルはスーシンが立ち上がるのを待った。

「大丈夫か？」

両手を地面についたスーシンは俯いたまま頷き、そのまま立ち上がった。

ゆらり。

スーシンの雰囲気が違う。どこか怯えたような、小動物のような
雰囲気だったというのに、今は違う。何か切り替わったように、
今の彼女は何か、違う。

「……………貴様」

セイルは苛立った。知っているのだ、この気配を。

『よお、また会ったな？』

軽い言葉に、セイルは強く睨みつけた。

憎悪にも似た感情の込められた殺気を、真正面から受けながらス
ーシンの姿を借りたそれは晒った。

何故彼の人は再び姿を現したのか？

赤硝子 始（後書き）

お久しぶりです。かなり長い間更新していなかったのですが、続きを楽しみにしていただきつつ方がいたら本当にすみません。更新が遅くなる可能性はありますが、まだまだ頑張って書くのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372d/>

未来、希望、私たち

2010年10月12日17時34分発行